ISSN　2187-638X

静岡英和学院大学

キリスト教研究年報

第二号

2014 年 3 月

静岡英和学院大学　キリスト教研究会

キリスト教研究年報　二〇一四年三月

静岡英和学院大学　キリスト教研究会

キリスト教研究年報　第二号

特集：キリスト教と教育

目　次

第二号発行によせて……静岡英和学院大学学長　武藤　元昭

地域文化活動「The 合唱団」がもたらす再帰性及びその教育的意味
－参加学生のレポート分析より－……コミュニティ福祉学科　山田美代子　1

『羅生門』と『幸福の王子』
……現代コミュニケーション学科　柴田　　敏　11

宗教改革者ブーゲンハーゲンの目指した教育改革についての一考察
……人間社会学科　伊勢田奈緒　17

鈴木幸子先生と静岡英和（インタビュー）……聞き手　伊勢田奈緒　29

木下ゆり先生と静岡英和（インタビュー）……聞き手　伊勢田奈緒　30

2013年度のチャペルとキリスト教行事の報告……　31

2012年度職員研修会におけるレジュメ……東北学院大学前副学長　出村彰牧師　32

執筆要綱……　37

編集後記……　38

第２号発行によせて

学 長 武 藤 元 昭

「キリスト教研究年報」第２号が無事発行される。洵に喜ばしいことである。

現在キリスト教大学に共通する悩みとしてキリスト者の減少ということがある。本学も例外ではない。そのような事情の中で本号が発行されたことに就いては、伊勢田宗教主任を初め限られた条件の中で鋭意発行に努力された関係者の方々に、心からの敬意を払いたい。

今号は、「キリスト教と教育」というテーマである。これはキリスト教大学が抱える大きな問題である。本学でも、１年生全員を主な対象として、週１度の礼拝を守っている。ほとんどが礼拝なるものに接するのは初めてという学生が相手であるから、運営も難しいところがある。学生たちにも戸惑いがあるのは当然であるが、それでも徐々に慣れてくるので、どうやら１年間全う出来ている。無論効果の程はわからない。文字通り主の御心のままにという感じであるが、それでも何人かの学生には礼拝の意味が通じていくようで、それだけでも感謝すべきことではある。また、大学生活の折々に、本学がキリスト教信仰を土台とした大学であることが理解されれば、関係する者にとっては大きな喜びである。大学の在り方が問われる昨今、本学にとってキリスト教教育の担う役割は大きいと改めて思わざるを得ない。

扨、本号では教育という視点からさまざまなテーマが提示された。「教育」の持つ範疇の広さに応じたものと言うべきである。これらによって、本学の限られたキリスト者教員の働きも、読者諸氏には察して戴けると思う。１学部１短大部から成る小さな大学の中に蒔かれたこれらの種が、本学のキリスト教教育の中で大きな実を結ぶことを切に願う。日頃キリスト教信仰を土台とした建学の精神が忘れられ勝ちな状況の中にあって、本号が持つ働きを考える機会を持つことは、意味のあることであろう。

地域文化活動「The 合唱団」がもたらす再帰性及びその教育的意味
－参加学生のレポート分析より－

山　田　美代子

1．はじめに

「The 合唱団」は、地域に暮らす人々が、誰でもいつでも自由に参加することができる合唱団を目指して 2004 年に発足したが、そのきっかけは下記のできごとであった。

ある女性が病気になり入院した。その後、退院したが、自宅で独り過ごすことが多くなり、外出の機会が減ってしまった。彼女は入院するまで音楽を通して人と交流をすることが生活の中心であったため、在宅支援を担当していた作業療法士は、公民館等で定期的に行われている合唱団へ参加できれば良いのではないかと考え、幾つかの団体を調べ相談してみた。しかし、どの団体でも彼女のように、病後の後遺症等を抱えた人の参加は難しいことが判った。そこで街に住む誰でも参加出来るインクルーシブな合唱団を立ち上げようと考え、病院で音楽療法士として勤務していた筆者に相談があり、2 人で協力してこの合唱団を立ち上げることになった。筆者は音楽コーディネーターとしての役割を担当し、今年で 10 年目を迎えている。

この合唱団の理念は、次の案内チラシがよく物語っている。

Ｔｈｅ合唱団ってどんな合唱団？！

歌は誰でも歌えます、使うのは声と身体。
１人で歌うのもいいけれど、声を合わせて歌う。
それがハーモニーを生み出したら楽しいに違いない！
しかも、いろんな人が声を合わせたら……？
若い人、高齢の人、元気な人、病気を抱えた人、身体の不自由な人、
声の出ない人、やさしい人、怒りっぽい人、大きい人、小さい人……。
ちょうど私達の社会がいろいろな人で成り立っているように、
この合唱団もいろいろな人が一緒に歌う。そして、その持ち味をハーモニーに生かす。もしかして、画期的なことをめざしています。
まずは、楽しんで。それからちょっとドキドキして。

私たちは、冒頭の女性と同じように、家事、仕事、日常生活活動、趣味など様々な作業を繰り返しつつ日々を過ごし、何らかのグループに所属し、家族、友人、仲間と共に生きている。しかし、一旦病気やケガなどによって心身に何らかの障害や弱さをもった途端に、参加したいという気持ちがあったとしても、趣味や習い事や学習等が以前のようにできなくなり、何かしようとしても地域の障害者団体に所属することを勧められ、これまでの仲間との活動を諦めざるを得なくなることも少なくない。また、その後の人生は、それまでと比べて受け身的な生活になり、コミュニティにおいても精神的にも物理的にも孤立するきっかけとなることがある。このようなことは、誰にでも起こり得ることであり、そこで「The 合唱団」では、どのような人にも門戸を開いたインクルーシブな地域文化活動として、また、これまでの音楽療法と異なるスタイルの活動として、その存在を発信しようとしたのがはじまりであった。

The 合唱団のこれまでの活動

このように地域文化活動としてスタートした「The 合唱団」は、街に暮らす誰でも参加できる合唱団であり、練習は月 2 回（内一回は平日夜、一回は週末昼間）、公民館のホール等を会場として始まった。会員制にはせず、参加したい時に自由に参加でき、会場費と楽譜代として、参加の都度、300 円の実費程度を払うことになっている。これまでの練習回数は 240 回を超え、参加者は当初は 10 人程度のこともあったが最近は常時 20 ～ 25 人程度であり、今回のような学生も含めれば 300 人以上の様々な人々が参加し、延べ 5,000 人近くが参加してきたことになる。このように誰でも歌いたい時に気軽に参加出来、年齢、性別、国籍、職業、また文化の異なるメンバーで構成する「The 合唱団」は、その多様性を強みに独特なハーモニーを生み出している。

これまでの参加者は、一人暮らしの高齢者、脳卒中による中途障害（片麻痺、失語症など）者、パーキンソン病、精神疾患、その他何らかの病気を抱える人、外国出身者、旅行で立ち寄った人（外国人も含む）、多忙な仕事帰りの人、退職した人、家族介護の息抜きに来る人、音楽家、音楽レスナー、他の合唱団所属者、医師、看護師、介護福祉士、作業療法士、言語聴覚士、理学療法士、音楽療法士、教員、主婦、学生など様々である。また、年齢は 1 歳未満の乳児～ 90 代の高齢者まで、姉妹、親子、夫婦、親戚、友達との参加、また個人参加等そのスタイルも様々である。

コンサートはこれまで 6 回開催している。日本福音ルーテル浜松教会で、地域住民を対象に 5 回行い、浜松市リハビリテーション病院では入院患者と近隣住民を対象に 1 回開催した。またこのほか、日本福音ルーテル浜松教会では、クリスマスの燭火礼拝にも、2 回出演している。

なお、筆者の専門は、音楽療法士であり、これまで病院や施設等で音楽療法を 20 年以上実践してきた。現在は本学に教員として勤務しており、臨床活動として浜松市でこの「The 合唱団」の活動を行っている。The 合唱団での筆者の立場は、音楽コーディネーターという位置付けで合唱指導等をしているが、あくまでも参加者の一人として楽しみながらボランティアで参加している。

コミュニティ音楽療法としての「The 合唱団」

音楽療法は、これまで施設や病院また学校等を実践現場として、主に特定の個人やグループを対象に行われてきた。「The 合唱団」のようにコミュニティにおける地域文化活動として行う例は珍しく、新たな音楽療法の流れとしてようやくその在り方が位置づけられつつある。

その特性は、北欧を中心に発展している「コミュニティ音楽療法」や、近年米国ニューヨークで始まった他言語や他文化の楽曲に挑戦し音楽を通して自分たちと違った文化や人々のことを思い理解するきっかけを促す統合的な「ヤングピープルズコーラス・オブ・ニューヨークシティー」（YPM）等と一脈相通ずるところがある。

わが国におけるこのような取り組みは、歴史的にはまだ浅い。コミュニティ音楽療法の流れにある文化中心音楽療法の概念は、2004 年 9 月に行われた第 4 回日本音楽療法学会学術大会に招聘された「文化中心音楽療法（2002，和訳：2008）」の著者、スティーゲの講演によって、新たな概念として関係者に認識されるようになった。The 合唱団は、2004 年春に発足しているので奇しくも同時期に類似した概念を持つ活動が、洋の東西で始まっていたことになる。

文化中心音楽療法では、「再帰性」と言うことがその重要な概念の一つとされている。文化中心音楽療法（2008）の「序」の中で、ブルーシアは「再帰性」の定義を、「他者との関係における自分自身の参照枠を確認すること」としている。また、「再帰性」の説明として、「個人が別の個人にある影響を及ぼし、それが元の個人にフィードバックしていることが確認できる場合、このような個人の関係、または個人と社会の関係は、再帰的であるといえる」がある（http://soudan1.biglobe.ne.jp/qa230053.html）。

先にも述べたように、The 合唱団には様々

な人々が参加しているが、筆者が担当している「音楽療法概論」を履修している学生も授業の一部としてこの活動に1，2回参加している。参加後に課したレポートの感想の中に、上記の「再帰性」を感じさせる文言が少なからず見られたため、今回その内容を分析しまとめ、それを通して The 合唱団の特徴等を捉えることにした。

この研究の目的は、「The 合唱団」に参加した学生が、メンバーと共に活動する中で、何を感じ、考え、再帰的にどのような影響を受けたのか、その体験を、感想レポートの記述から明らかにすることであった。

2．方法

対象：The 合唱団に参加後提出された、某大学1～3年生25名の感想レポート。自由記載で A4 各1枚

The 合唱団への参加期日と内容：（学生以外の参加メンバー数は両日とも約20名）

平成23年5月14日（土）2時間

練習した楽曲：「しゃぼん玉」、「さんぽ＆となりのトトロ」、「浜松市歌」、「かえるの歌」、「ビリーブ」等。

学生は The 合唱団のメンバーの間に入り、合唱し、合間に会話をした。

同6月18日（土） 2時間

第4回コンサート録画の観賞、練習した楽曲：「ジュピター」等

この日は、会場の都合で活動を大学で行うことになり、学生達は教室の準備と、バスや車で来る参加者をバス停や駐車場まで迎えに行き、音楽室まで案内するという役割を担った。その後メンバーの間に座り、合唱し、会話をした。

分析方法：記述された内容を、1内容1ラベルとして転記し、その内容を類似したもの同士でまとめ、カテゴリー化した。

3．結果

学生25名の感想レポートに記述された内容をラベル化した結果、合計176枚のラベルになった。今回はこのうち、「学生が The 合唱団に参加する中で感じたこの合唱団の特徴」と「The 合唱団に参加している時に、何かしら感じたその時の状況と参加により受けた影響・内面的変化」を結果として示す。

(1) 学生が The 合唱団に参加する中で感じた「The 合唱団の特徴」（表1）

The 合唱団の特徴については、14名の学生が、22のコメントを書いている。これをカテゴリー化して表の形で示したものが表1である。

それぞれの具体的コメントに含まれる内容をカテゴリー化したところ、次の六つにまとめることができた。

即ち、①楽しく気楽な場の提供、②社会的交流（インクルーシブな関係のコミュニケーション）、③メンバー構成が多様（誰でも気楽に参加できる）、④自発性重視、⑤音楽的要素（クライエント中心の選曲や音響設定）、⑥日常的経験との結びつき、である。

表1の右欄の具体的コメントそれぞれについて、該当するカテゴリーに「1」の印を付けた。コメントは、一つのカテゴリーの内容を含むものから、四つのカテゴリーの内容を含むコメントまで、様々であった. 例えば、*「誰もが気軽に参加でき、楽しい時間を多くの人と共有できる場があることを素晴らしいと思った」*や、*「誰でも受け入れてくれる温かい雰囲気がとてもいいなぁと感じた。あの場にいるだけで笑顔になれる場所が、The 合唱団だと感じた」*は、一つのコメントに、四つのカテゴリーの意味が含まれている。

The 合唱団の特徴を示す感想を全体としてまとめると、多様性のあるメンバーによって*「楽しく気楽な雰囲気」*で*「誰でも受け入れ、互いを尊重し合うインクルーシブな交わり」*が行われている。また、*合唱（集団で歌う）*という活動が*「楽しく多くの人と共有する場」「みんな同じで先生はいない。仲間の意見を尊重し合う環境」「居るだけで笑顔になれる場」「一人の人間として存在する場」*と捉えられており、一般的な音楽という枠を超越した記述が多かった。

さらに、*「私語を慎むのではなく、自分の*

表１.「The 合唱団」の特徴に関するコメント（n=14）

カテゴリー						回答者による具体的コメント（左欄にカテゴリーを示し、該当欄に１を記した）
楽しく気楽な場の提供・雰囲気（メンバー・セラピスト）	社会的交流（インクルーシブな関係のコミュニケーション）	メンバー構成が多様（誰でも気軽に参加できる）	自発性重視（演奏は思いを伝える、個人の表現、自律的等）	音楽的要素（クライエント中心の選曲や音響設定、質等）	日常的経験との結びつき	
1	1	1			1	誰もが気軽に参加でき、楽しい時間を多くの人と共有できる場があることを素晴らしいと思った。⑦－２
1	1	1			1	誰でも受け入れてくれる温かい雰囲気がとてもいいなぁと感じた。あの場にいるだけで笑顔になれる場所が、THE 合唱団だと感じた。22
1	1		1		1	この合唱団では、みんな同じ、先生はいない。全員が仲間の意見を尊重しあい、盛り上げている。とても良い環境である。21
1	1					メンバーのメッセージを聞き、THE の存在が大きいことを感じた。メンバーと観ている人（聴衆）を楽しませることができる⑬
1	1				1	全員が和気あいあいとしていて、とても笑顔が素敵だなと思った。積極的に話しもして下さったし、この和やかな雰囲気が、参加者の方々は大好きなのではないかと感じた。23
1		1			1	音楽活動（で）は、年齢や国籍や宗教など関係なく一人の人間としてその場に存在できるものだと思う。THE はまさにそのような場だった。24
1			1		1	来たいときに来ればいい、途中で抜けてもいいという自由な体制が来やすい（参加しやすい）環境を作っている。⑧－２
1				1		合唱のクオリティも、和やかな雰囲気も含めて、とても良い発表（コンサート）だと思った。23 －２
1						初めて参加した私もすごく楽しいひとときだった。音楽を感じた瞬間だった。22 －２
	1	1				障害の有無は関係なく、壁が無く関われることに感動した。⑱
	1	1		1		能力・障害も大きく違うので、皆が分かり易く楽しめる音楽を提供する。⑦
	1		1			この授業で一番驚いたことは、団員の方全員が意見を出し合っている。大抵の集団は、指導者が話しているときは他の人は私語を慎む。しかし、この合唱団は全員、自分が思ったことはその時言葉にしているように感じた。21
	1		1			しっかりと自分をもち、人は皆個性あるのだと分かっているようなところ①
	1			1		（ビデオによるコンサートで）最初、お客さんの反応が薄かったことが面白かった。徐々に反応は濃くなっているのが分かったので、音楽のもたらす力目に見えないパワーが音楽にあることを実感した。24 －２
	1					障害者の方が優先されてり、何か特別なことがあったりするのかと思っていたが、一緒に歌ってみて全然そんなことはなかった。⑪
		1	1			誰でも参加でき参加した人たちが自主的に何かをやろうとし、みんなが笑顔になることができる素晴らしいもの⑫
			1	1		感動し、印象に残っているのは片麻痺の方がハーモニカを吹く姿。ひとつひとつの音に力強さを感じ、魂を感じた。健常者の方のハーモニカの音よりずっと素晴らしい演奏でとても心を揺さぶられた。④ -2
			1	1		目指している目標のレベルも高く、ひとつの大きな目標を持つことでやる気が起き、意欲が湧いて、体も使えてリラックスにもなり、音楽一つで様々な効果があるのだと思った。人の心を明るくす力があると感じた。⑤
			1			演奏をした人自身（ハーモニカ奏者は）生きる希望を見つけたのではないかと思った。④－２
			1			歌でパワーを伝えられる人は、才能よりも気持ちが大きく関わっていると思う。⑥－２
			1		1	やりたいと思う事、興味のある事に意欲的に取り組んでおり、自らの生活に楽しみを作ろうという姿勢が感じられた。隣の人は発表（コンサート）を見て、自分も加わりたいと思ったそうだ。⑦－２
				1		人と人をつなげる役割を果たし、会話をしなくても気持ちをつなぐ力がある。⑧－２

思ったことを言葉にしている」「*障害のある人を優先したり特別扱いしない*」「*誰もが自主的に何かをやろうとすることで笑顔になれる*」「*しっかりと自分を持ち人には個性があるものだと理解している*」等、The 合唱団に参加しているメンバーが、バリアのない自発性の高い人々ととらえていることも挙げられていた。

また、音楽的特徴として「*能力や障害に応じた音楽提供*」、ハーモニカ奏者（片麻痺者）の演奏を「*魂のこもった演奏*」、「*才能より気持ちが歌の力となっている*」「*会話をしなくても気持ちをつなぐ力*」等、対象者中心でそこに流れる気持ちが重視されていることも挙げられた。

⑵ 「The 合唱団に参加している時に、何かしら感じたその時の状況と、参加により受けた影響・内面的変化」について（表 2）

学生が The 合唱団に参加している時に、「何かしら感じたその時の状況」については、24 名の学生が 31 のコメントを書いたが、これを表 2 の左欄に示した。また、「そのことから受けた内面的影響・変化」（再帰性）についても同じく 24 名の学生が 31 のコメントを書いており、それを表 2 の右欄に示した。

それぞれの内容をカテゴリー化したところ、次のようにまとめることができた。
即ち、「何かしら感じたその時の状況」は、①歌っている姿、②相互交流、③メンバーの持つ特性との出会いの三つであった。また、「そのことから受けた内面的影響・変化」（再帰性）は、①インクルーシブな考え、②人とつながるぬくもり、幸福感、③人とコミュニケートしたくなる、④前向きな生き方、⑤自律性であった。それぞれの具体的コメントが該当するカテゴリーの部分に「１」の印をつけた。

前述のように、表 2 の左欄の三つのカテゴリーは、歌っているプロセスにおいて起きたことであり、右欄の五つのカテゴリーは、左欄の体験、即ち、「The 合唱団」というグループで出会った音楽や人との交流の中で、他者の立場になって自己を見つめ内省し、再帰的に感じられた自分への気付きや将来に対する思いの記述からなっている。

左欄の具体的内容として、例えば学生は、「The 合唱団」に参加し、そこに集ったメンバーが皆で歌い、「*全体が一つになり*」「*全ての人がつながる共有の場*」において「*一生懸命に皆が手を取り合って生きている*」*姿にふれる中で、他者と音楽を共有する*合唱という音楽的体験を通して、音楽そのものの持つインクルーシヴな力について書いている。それは、メンバーの一人（失語症）がハミングで発声をすると、その声をベースに「*様々な音が混成して何とも言えない音色が、心地良かった。自分も（声を）重ねることで幸せな気分になった*」「*上手下手ではなくみんなで歌うこと*」*に意味を感じ*、「*歌に自分の気持ちをのせ*」「*歌っている一人ひとりが個として存在を自覚し、みんなで歌っている*」等、があった。その他、メンバーの発する「*イキイキ感、ワクワク感、温かさ、優しさ、笑顔*」にふれ、「*参加することの楽しさを感じた*」等、活動のプロセスで起きた感情についても臨場感のある言葉で記述されていた。

右欄の再帰的カテゴリーの具体的内容として、例えば学生は、「*将来、仕事を通して出会う人たちのニーズに応え、支えたい*」「*上手くいかないことがあっても、前向きに頑張りたい*」「*歌うことは苦手だったが、仲間と再会して一緒に歌いたい*」「*将来は自分の方から心を開くように心がけたい*」「*自分から楽しんで取り組みたい*」「*わざとらしくなく自然体で相手の不安を取り除ける大人になりたい*」「*自分の意見を持ち、自分で考え行動したい*」等、音楽を体験しながら自分自身を振り返り、将来について語っていることが明らかになった。

以上のように学生は、「The 合唱団」の練習の即興的なセッションに参加し、そのプロセスにおいて「The 合唱団」のメンバーにふれ、個々に感じたことを記述していた。特に、そうしたフィールドにおけるこれまで経験したことのない感覚や気づきについて書かれていたことから、「The 合唱団」の特徴を体験

表２.「The 合唱団」に参加（音楽）している時に、何かしら感じたその時の状況及び参加により」受けた影響・内面的変化（n=24）

カテゴリー					再帰的カテゴリー*				
歌っている姿	相互交流	メンバーのもつ特性との出会い	参加（他者と音楽）している時、何かしら感じたその時の状況具体的コメント（左欄にカテゴリーを示し、該当欄に１を記した）	参加により受けた影響・変化（内面的）具体的コメント（右欄にカテゴリーを示し、該当欄に１を記した）	シンクルな考え	人とつながるぬくもり幸福感	人とコミュニケートしたくなる	前向きな生き方	自律性
1	1	1	障害に関係なく、誰でも気持ちが一つになれるものだと感じた。そうした中で一つの音楽ができることは素晴らしいことであると思った。③	障害の有無や年齢には関係なく、大切なのは、その場を楽しむことだということに気付いた。周りの状況を考慮して曲を考えることが大切であるということ。③	1	1	1		
1	1	1	楽しそうに生き生きしていた。自分のできることはみんなのために、と自分から声を出す人､自分の知識を活かして情報を共有する人、率先して準備・片付けに手を貸す人②	この世にいる人は、皆同じ輪の中に生きていると思った。障害者であろうと健常者であろうとそんなことは関係がなく、手を取り合って生きているのだと感じた。②	1	1			
1	1	1	誰でも受け入れてくれるところがいいなぁと思った。上手く言葉が出なくても、音が外れても、誰もが積極的に声を出し、楽しいハーモニーが響き渡っているなぁ、と思った。22－2	高齢になったり、障害があったりすると何もできない（という）訳ではなく、楽譜を読んだり楽器演奏も出来るということを知った。何をするにも、やりたいという気持ちが大切なのだと思う。将来、（仕事を通じて出会う人たちに）やりたいと思えることを提供し、意欲がもてるように（支えたい）と思った。22	1				
1	1	1	今回（THE のメンバーと）一緒に歌ったことが本当に楽しくてストレスが発散できた。④	大学に入学して１ヵ月位経つが授業が難しくてとまどっていて、最近、情緒不安定になっていた。上手くいかないことがあっても前向きに頑張ろうという気持になれた。④				1	
1	1		参加していたみなさんの障害や病気は分からなかった。歌っている時の笑顔が印象的だった。体全体でリズムをとっていた。⑤	音楽は人と人とを繋ぐ力がある。聴いている方々（人）も歌と音楽によって心が一つになり、元気をいただいているのではないかと思った。⑤－２	1	1			
1	1		生き生きしていて、心から歌うことを楽しんでいる⑧－２アットホームな開放感のある温かな空気を作り出している。⑧－２	年齢や性別、自身の環境などが違っても心は通わせることが出来るのだということを実感した。⑧－２	1	1			
1	1		歌唱力に自信がなく、（これまで）カラオケに誘われても、断っていた。始まると自然と楽しくなってきて普段では考えられないくらいの大きな声で歌った。・・・・歌っていて楽しいと感じることができた。	歌や音楽がコミュニケーションツールになってくれるだろうと思う。⑥歌うことへの恐怖が少なくなった。（今後）最近誘ってくれなくなった友達をカラオケに誘ってみようと思った。⑥			1		
1	1		最初に隣の方にあいさつした時、ぎこちなく感じた。が、みんなで歌っていくうちに緊張がほぐれてきたようで笑顔で話しかけてくれ、少し距離が縮まったように感じた。25－２	人の温かさを感じた。家族の方も隣りに座って一緒に歌ったり、楽譜をめくったり、と家族の優しさ、大切さを実感した。25		1			
1		1	失語症の人がハミングのように声を出す姿に感動した。②	様々な音が混成して何とも言えない音色がとても心地良かった。自分もその中で声を重ねることにより、幸せな気分になった。②	1	1			
1			みんな笑顔だった。全員が楽しそうに歌っていて素敵だと思った。歌いながらアイコンタクトをとるなど、音楽を通してコミュニケーションがとれることが分かった。⑲	歌の上手な人も得意でない人も、みんなで楽しく歌うことが出来るあの空間がすごくいいと思った。⑲	1	1			
1			自分の気持ちを歌にのせることは、ほんとうに気持ちがよいもの。⑭	堂々と歌っているのは（THE の人たちが）一人の個人として the 合唱団の一員としている。大切なことは､楽しくみんなで歌うこと、簡単だけども、重要なことに感じる。この経験を生きていく中で生かしていければいいなと思う。⑭－２	1	1			1
1			歌うことにより、参加者が一つになれると感じた。さらっと歌って気持ちよく終わることができた。⑱－２	障害による壁はないと知った。音楽の話しなら話したことのない人でも緊張せずに話せる。THE を通して知らなかったことに気付けて良かった。⑱	1		1		
1			歌を歌うという行動の中には思いやりが満ちているように思えた。⑧	THE の方達のように、聴いている側、一緒に歌っている側までをも楽しませるような魅力ある人になりたい。⑧	1			1	
1			最初、緊張していたが、だんだんとほぐれ、音楽が及ぼす力は素晴らしいと改めて思った。一緒にいて嫌な感じがせず、むしろ居心地がよくてずっとここに居たいとさえ思った。24	音楽活動（で）は、年齢や国籍や宗教など関係なく一人の人間としてその場に存在できるものだと思う。THE はまさにそのような場だった。24	1				
1			それぞれみんな音楽好きで第三者にもイキイキ感やわくわく感が伝わってくる。これが、音楽療法の醍醐味ではないか。⑳－２	健常、障害と限定した団体よりも素敵だなと感じた。同じ空間にいて、同じことをする場自体なかなかない。実現できるのが、音楽の長所ではないか。⑳－２	1				
1			歌を歌うこと自体は本当に気持ち的にもやさしくなれたし、楽しめた。⑰－２	穏やかな気持ちになった。どんな人でも清き心が持てそうな気がした。⑰精神的に問題を抱えた人に効果があると思った。それは、自分にも少し人見知りのところがあるが、音楽療法を通して知り合えば関わることができると思ったから。⑰－２		1	1		

1			全員がとても生き生きしていた。周りにいた方々は、とても楽しそうに大きな声を出していて、となりで歌っている私まで、気持ちが良くなるほどだった。笑顔が輝いていてとても素敵な表情をしていた。⑯	楽譜を渡すと「ありがとう」と言われ、なんだか嬉しい気持ちになった。たとえ些細な出来事であっても、感謝されることがいかに原動力につながるかというこにも気づかされた。⑯出来ないことや動かないところに目を向けるのではなく、不自由な部分があっても新たにできることを見つけることが重要だと気付かされた。⑯－2		1		1	
1			THE のメンバーが笑顔で歌っている① 音程を外すことを気にせず堂々としている。①	私たち学生は遠慮がちな表情から、次第に笑うようになっていった。①		1			
1			参加している人みんなが、それぞれ対等ば立場に立って、歌や手拍子などさまざまな音楽を奏でていた。⑫誰でも参加でき参加した人たちが自主的に何かをやろうとし、みんなが笑顔になることができる素晴らしいもの⑫	人の温かさや優しさを強く感じた。⑫		1			
1			高齢であろうと障害があろうと、歌うことを楽しみに参加していることが、歌っている姿から感じられた。25	最初に隣の方にあいさつした時、ぎこちなく感じた。が、みんなで歌っていくうちに緊張がほぐれてきたようで笑顔で話しかけてくれ、少し距離が縮まったように感じた。25－2		1			
1			慣れていくうちに緊張がほぐれて大きな声で歌えるようになった。⑬－2	THE の人たちと歌って、教室全体が一つになっていると感じた。⑬－2		1			
1			皆と一緒に恥ずかしがらずに声を出していると、自然と周りの人たちとの距離が近づいたように思い、嬉しかった。⑦	（将来）自分の方から心を開くように心がけようと感じた。⑦			1		
1			皆さん（THE のメンバー）が、一生懸命歌っていた。③	私はこれから辛いことはあるけれど、それを乗り越えて頑張っていかなければならないと感じた③				1	
1			歌っている時、歌い終わった時の表情は、とても楽しそうに見えました。⑨	自分が将来実践する時には、自分から楽しんで取り組みたい。⑨					1
1			ホールにいたすべての人が心から楽しそうにしていた。⑪	今まで私が所属していたグループ（活動）は、どれもレベルをより高くすることが目的だった。より質の高い音楽を求めることは楽しいが、質の良し悪しを求めず気楽に参加して、自由に歌うことも十分に楽しい。リハビリもあくまで患者さん自らが行うこので、こちらが強制して行うものではない。自由に参加する THE のような雰囲気で、その患者さんに合ったペースで行ってこそ、効果があると思う。未知なるリハビリに未知なる音楽を活用することはおもしろいし、興味深い。⑪					1
	1	1	全員が和気あいあいとしていて、とても笑顔が素敵だなと思った。積極的に話しもして下さったし、この和やかな雰囲気が、参加者の方々は大好きなのではないかと感じた。23	一人の女性の方（THE のメンバー）と、私の地元の話しで盛り上がった。「一人暮らし頑張ってね」と言われた時は本当に嬉しかった。これから音楽に接していく上にも、音楽は人を幸せにしたり感動させたりするだけでなく、人と人を繋げたり、心を豊かにするといった考え方も持てるようになった。23		1			
	1		どんな人でも助け合いながら、音楽を楽しむ時間を共有できる場を設けることは素晴らしいと感じた⑩	日常生活では気の合う同じ年代の人と交流を持つことが多い。しかし､現場は異なる年代、宗教、生まれ育ち、価値観、職種の対象者と共に（関わる）。学生時代からいろいろな人と関わり、自分の視野を広めていくことは机の上の勉強と同じくらい必要なことだと思った。⑩	1		1		1
	1		この合唱団では、みんな同じ、先生はいない。全員が仲間の意見を尊重しあい、盛り上げている。とても良い環境である。21	自分から率先してやりたいと思えることの方が効果は大きいと思う。21					
		1	車椅子の方と一緒に参加しえいる女性（妻）は、片手を必ず男性に触れてリズムをとりながら時々男性の目を見ながら歌ていた。⇒21－2	将来、人と関わる仕事に就く（予定）だが、思いやりの精神は大切だと思う。わざとらしくなく、自然な形で相手の不安を取り除ける大人になりたいと思った。21－2		1		1	
		1	（メンバーは）しっかりと自分をもち、人は皆個性あるのだと分かっている①	私も周りに流されずのではなく、自分の意見を持ち、自分で考えて行動したいと思った。①				1	1
		1	私も年をとってもTHE の方たちのように楽しみを見つけて生きていきたいと思った。た。④	楽しみを見つけて生きていきたい④				1	

＊再帰性①：他者との関係の中で自分自身を考える能力（スティーゲ）
②：他者との関係における自分自身の参照枠を確認すること（ブルーシア）

的に理解し、その中での相互交流により、自分自身と向き合っていた様子が、今回の感想レポートの分析を通して明らかとなったと言えよう。

4．考察

本研究の目的は、「音楽療法概論」の授業を履修した学生が、地域文化活動として行われている「The 合唱団」に参加し、メンバーと共に活動する中で、この活動に何を感じ、どのような影響を受けたか、その体験をレポートの記述から明らかにすることであった。学生の記述をラベル化し、類似した内容のものをまとめ、カテゴリー化した結果、「学生が参加する中で The 合唱団の特徴として感じたこと」、「観察した場面とそのことから受けた影響」が中心的テーマとして浮かび上がった。その中に、この合唱団に参加したことによる「再帰性」、即ち「他者との関係における自分自身の参照枠を確認する」、また、「個人が別の個人にある影響を及ぼし、それが元の個人にフィードバックしていることを確認する」ということが感じられる記述が見られた。以下、そのような観点にも触れつつ考察する。

⑴　学生が The 合唱団に参加する中で感じた「The 合唱団の特徴」

先にも述べたように、「The 合唱団」は、これまでの病院や施設における医療福祉的音楽療法とは異なり、コミュニティにおいて展開しつつある音楽療法の新たな流れである地域文化活動として実践されてきた。

The 合唱団の特性について山田ら（2010）は、当時の通常の参加者にアンケートを行い、この合唱団への参加が参加者の生活にもたらしている意味について調べた。その結果、The 合唱団の特徴は、心理的、物理的、時間的にバリアの低い、居心地の良い合唱団であり、交流やリフレッシュの機会を提供しており参加者の生活に不可欠な場であるという結果を得た。

今回は、単発的参加者である学生の視点から、「The 合唱団」が醸し出している雰囲気、特徴や、メンバー間および学生との相互作用によって起きている事柄、また学生への内面的影響について明らかにすることができた。まず、学生達が参加する中で感じた「The 合唱団」の特徴は、楽しく気楽な場としてインクルーシブな関係によるコミュニケーションが存在するということであった。これは、多様なメンバーが自律した存在で自発的であることを尊重され、また音楽的表現においても技術より対象者の能力に合わせ、参加者の気持ちが優先されていることから来ているのではないかと思われた。「The 合唱団」ではその日に練習したり歌ったりする楽曲は予め決められておらず、集まったメンバーにあわせて選曲され、またメンバーの歌う様子や反応によって臨機応変に音楽的な練習方法が変化し、休み時間も参加者の様子をみて決められている。今回参加した学生も、お客様ではなく、そのようなメンバーの一員として扱われたことから、自分自身も自由で楽しく感じ、メンバーの様子にもそれを投影して再帰的にも楽しさや居心地の良さをこの合唱団の特徴として感じていたのではないかと思われた。

ルード（スティーゲ，2008 より）は、音楽療法における即興活動が親密性と相互性を生み出す「共同プロジェクト」であるとしており、ここには最も信頼性のある評価尺度としての感情体験が存在すると述べた。前述のように「The 合唱団」の活動は、臨機応変で即興的に推移する。それが、学生もメンバーの一員として歌い、交流し、感じた「音楽的自発性、調和」などの The 合唱団が持つ特徴を感じるもとになっていたのではないかと考えられる。

⑵　学生が「The 合唱団に参加している時に、何かしら感じたその時の状況と、参加により受けた影響・内面的変化」について

学生は、「The 合唱団」に参加している中で、一人ひとりこれまでの人生を振り返り、自分と向き合い内省し、様々な気持ちが起こったこと、またこれからの将来に向かって得られた示唆を記述している。学生は、「The 合唱団」へメンバーの一人として参加する中で、メン

バーの姿、発言、行動に触れ、またメンバーとのかかわりを通して、実に感受性豊かに様々なことを感じ、考えている。即ち、「他者との関係における自分自身の参照枠を確認」し、The 合唱団メンバーとの関係においてフィードバックを得、再帰的に自己理解を得たのではないかと思われる。

「The 合唱団」の何がそこまで学生の気持ちを動かしたのであろうか。

ルード（スティーゲ，2008 より）は、「音楽療法における即興活動が、社会的な役割の差違を取り除きながら、どれほど強い平等体験と調和感をもたらすか」、ということを強調しているが、先にも述べたように The 合唱団は、その日の参加者やその場の状況に合わせて歌も場面も変わるという即興性の中で行われている。学生は単発的参加者であるにもかかわらず、何の抵抗もなくメンバーの一人として扱われ、参加者が自由に発言し、音楽活動が進行してゆくという「The 合唱団」の柔軟性、即興性が、ルードの言葉を借りれば、「学生と通常のメンバーといった社会的役割の差異を取り除き」、「学生に平等体験と調和感をもたらし」、それが学生の気持ちを解放し、「他者との関係における自分自身の参照枠」を素直に確認する機会をもたらし、前向きに人生を見つめる気持ちへと転換させたのではないかと思われた。

⑶　コミュニティ音楽療法について

The 合唱団はコミュニティ音楽療法として行われてきた。

スティーゲ（2008）は、「ヘルスシステムまたはセラピストという職業が、健康に関する問題はクライエント自身の問題であるとするならば、もはや機能していないことは明らかである」と述べている。さらに「健康問題を家族やコミュニティという観点から考えていくことは多くの事例において本質的なことであるように思われる。人類学から流用したソーシャル・ネットワークの概念は多くのクライエントと活動をするための有用なツールである。生態学的、システム理論的な方向性が新しい課題と取り組むためには必要なことであろう。そのため、個人に対する治療に関する知識と理論は、社会教育的、社会心理学的、社会精神医学的なアプローチと結びつかなくてはならない」と記し、地域社会における音楽療法の重要性を述べている。

さらに、スティーゲは「個々人の成長と発達はコミュニケーションに依存しており、コミュニティの発展もまた同様である」と述べ、またノルウェーの哲学者ニーナ・カーリン・モンセン（スティーゲ，2008 より）は、「私たちは他者を見聞きし、他者によって見聞きされるときのみ、つまりコミュニケーションを可能とするときにのみ、自分自身でいることができ、自分が誰であるのかを知ることができる。コミュニティは、この言葉自体からもわかるように、コミュニケーションである」と述べている。

このような新しい音楽療法の流れの先駆けとして始まり、これまで活動を続けてきた The 合唱団が参加者にどのような影響を与えているか、今回は、単発的な 2 回の参加者であった 25 名の学生の感想レポートをもとに分析した。この結果は学生にとって「他者（The 合唱団）との関係における自分自身（学生）の参照枠を確認する」重要な機会となり自らの人生や生き方を見つめ直している様子が示された。また、筆者にとっても再帰的にこの合唱団を振り返ることが出来た。つまり「個人（The 合唱団）が別の個人（学生）にある影響を及ぼし、それが元の個人（The 合唱団）にフィードバックしていることを確認する」という再帰性を知る機会となった。

まとめ

以上、筆者が担当する「音楽療法概論」を履修し、「The 合唱団」に参加した 25 名の学生の感想レポートを分析し、その中から浮かび上がってきた「The 合唱団の特徴」および「参加する中で感じたことと、それによる気持ちの動き」についてまとめた。2 回の参加の中で学生は楽しく自由な雰囲気、メンバーの自律性、自発性、インクルーシブな人との関係などを感じ、経験し、それらを通して自分を振り返り、内省し、再帰的に自分自身を

確認している様子がうかがえた。

「The 合唱団」がこのような影響を与えうる背景には、その進め方の「即興性」が関係しており、ルード（スティーゲ，2008 より）の「音楽療法における即興活動が、社会的な役割の差違を取り除きながら、どれほど強い平等体験と調和感をもたらすか」ということが、学生の感想に反映しているように思われた。

4．謝辞

本稿をまとめるに当たり、「The 合唱団」に参加し詳細な感想レポート提出された学生諸氏、「The 合唱団」の、コ・コーディネーターである河本のぞみ氏、及び、原稿を御校閲頂いた宮前珠子氏に深謝いたします。

5．文献

佐藤賢太郎（2013）：ワークショップに参加して．音楽教育ヴァン，p4, 5

スティーゲ，ブリュンユルフ（2008）：文化中心音楽療法 . 音楽の友社，p99-100, p164, p284

山田美代子、河本のぞみ、宮前珠子（2010）：地域文化活動としての「The 合唱団」が参加者の生活にもたらしている意味．静岡英和学院大学紀要，p293-301

Ruud, E.（村井請児訳）（1992）：音楽療法－理論と背景－，ユリシス・出版部

「羅生門」と「幸福な王子」

柴　田　　敏

序

芥川龍之介の「羅生門」は、高等学校国語科の教材として教科書にも採用されており、多くの人に読まれ、親しまれている作品である。

「羅生門」は 1915（大正 4）年に『帝国文学』に発表された。今昔物語集巻第二十九の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」を元とし、同じく巻第三十一「大刀帯陣売魚嫗語第三十一」を加えて構成されている。ただし、現在広く読まれているのは初出本ではなく、1918（大正 7）年発行の短編集『鼻』収録版であるので、ここでもその本文によることとする。

羅生門の楼上で、死人の髪を抜き取る老婆を取り押さえた下人が、逆に老婆の衣服を奪い取って、闇の中に消える。この作品が何をテーマとして描き出しているのかについては、さまざまな見解が出されている。人間のエゴイズムや弱さを描きだした作品であるとされることもある。あるいは、生きるか死ぬかの世界で、たくましく生き抜いていく力を得た下人の姿を描いたものとされることもある。

一方、オスカー・ワイルドの「幸福な王子」（「幸福の王子」ともいう。原題は“The Happy Prince”）は、「羅生門」よりも 27 年前、1888 年に短編集“The Happy Prince and Other Tales”の一篇として発表された。この作品が初めて日本語に翻訳されたのがいつ、誰によってであるのかについて、小論の筆者は寡聞にして不明なのだが、日本でもよく知られた作品であることは疑いない。そして、多くの人は、幼少期に童話としてこの作品に触れているのではないだろうか。

町の中心にある王子の像のところに、エジプトへ渡る途中のツバメがやってくる。王子はツバメに、自分の体の一部をなしている宝石や、体を覆っている金箔を取って、貧しい者、悲しい思いにある者に届けてほしいと依頼する。やがてツバメは冬の寒さで死に、みすぼらしくなった王子の像は鋳つぶされる。しかし二つの魂は天に上げられる、という話である。

まことに対照的な二つの作品だが、両作品には、実によく似ているところもある。その両者を比較対照することから、国語の授業としても、またキリスト教に関する授業としても、ヒントが得られることもあるかと思い、考察してみることとする。

なお、「幸福の王子」の訳文は、西村孝次訳の新潮文庫版を用いる。

1・出会い

人物Ｂは、人物Ａと出会う。

二つの物語は、ともに二人の登場人物が出会うことで展開していく。「幸福な王子」の場合は、王子の像とツバメが出会うのだが、便宜的に「登場人物」としておく。そしてその出会い方にも、次のように似通っている。

人物Ａ　出会う以前からそこにいた人物
　　老婆　　王子の像
人物Ｂ　そこへやって来た人物
　　下人　　ツバメ

「羅生門」では、下人が羅生門の楼上に上がる前から、老婆はそこにいた。下人はそんなことは知らず、「或日の暮方」に、「羅生門

の下で雨やみを待つてゐた」のである。この時の下人の心情は、次のように描かれる。

> どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでゐる遑（いとま）はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為に、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにゐたのである。

そして「勇気」の出ない下人は、「雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晩楽にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つた」ので、楼の上に出る梯子を登る。その途中で、楼上に誰かが居るのに気がついた。そして下人は、「檜肌色の着物を著た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆」の姿を認めた。さらにその老婆が死人の髪の毛を抜いているのを見た。

> その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た。――いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢いよく燃え上り出してゐたのである。

下人にとっては「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた」ので、彼は老婆に躍りかかり、「とうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭（ね）ぢ倒した」のであった。

◆

「幸福の王子」では、まず冒頭に王子の像が登場する。

> 町の空高く、高い円柱の上に、幸福な王子の像が立っていました。全身うすい純金の箔がきせてあり、目にはふたつのきらきらしたサファイアが、また大きな赤いルビーが刀の柄に輝いていました。
> High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince. He wasgilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.

ツバメは、次のように登場する。

> ある夜、一羽の小さなつばめが、この町の上空へ飛んできました。友達は六週間まえにエジプトへ行ってしまったのですが、彼だけはあとに残っていました。というのは、一等美しい葦に恋をしていたからです。
> One night there flew over the city a little Swallow. His friends had gone away to Egypt six weeks before, but he had stayed behind, for he was in love with the most beautiful Reed.

しばらく葦とつばめのやりとりが描かれた後、つばめはやっとエジプトに向けて旅に出る。そして、つばめがこの町にやって来た様

子がふたたび描き直される。

一日じゅう、つばめは飛びつづけ、夜になってこの町に着きました。「どこに泊まろうかな？町で用意してくれているといいんだがな」

そのとき、高い円柱の像が目にとまりました。

「あそこにとまろう。さわやかな風のかよういい場所だ」。そうして幸福な王子の両足のまんなかにとまりました。

All day long he flew, and at night-time he arrived at the city. “Where shall I put up?” he said; “I hope the town has made preparations.”

Then he saw the statue on the tall column.

“I will put up there,” he cried; “it is a fine position, with plenty of fresh air.” So he alighted just between the feet of the Happy Prince.

さて寝ようとしたツバメの体に、大きな水のしずくが落ちてきた。続けて落ちてくるので、ツバメは寝場所をかえようとする。

ところが、翼をひろげないさきに、また一滴落ちてきました。それで、つばめは目を上げて、見たのです――ああ！何を見たのでしょう？

幸福な王子の目が涙でいっぱいになり、黄金の頬を涙が流れ落ちていたのです。王子の顔が月光を浴びてあまりに美しかったので、小さなつばめは憐れみの気持で胸がいっぱいになりました。

But before he had opened his wings, a third drop fell, and he looked up, and saw – Ah! what did he see?

The eyes of the Happy Prince were filled with tears, and tears were running down his golden cheeks. His face was so beautiful in the moonlight that the little Swallow was filled with pity.

このようにして、二者は出会っている。ただ、この時下人の心にあったのは「あらゆる悪に対する反感」「悪を憎む心」であったのに対し、ツバメのそれが「憐れみの気持」“pity” であったことが、両作品の描く世界の違いに対応している。

2・変えられる

人物Ｂは、人物Ａによって変えられる。

下人は老婆の言葉を聞くことによって変えられる。ツバメもまた、王子の頼みを聞いているうちに変えられる。「羅生門」が一夜の出来事であるのに対し、「幸福な王子」は、正確には分からないがおそらく１週間を超える期間の出来事であるという違いはあるが、人物Ｂが人物Ａによって変えられるという点は同じである。ただ、その変えられる方向は正反対である。

下人に対して

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘にせうと思うたのぢや。」

と、死人の髪の毛を抜いていた理由を説明する老婆の言葉は、以下のとおりである。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云ふて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方

がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

海老井英次（1991）[1]は、この自らの行為を正当化する〈老婆の論理〉には、次の二つの論理が展開されていると指摘する。

- 〈悪〉を働いた者に対しては、〈悪〉をなしても許容される。
- 生の極限状況において、仕方なく犯す〈悪〉はこれまた許容される。

しかし、一読していかにもうなずけるこの〈老婆の論理〉は、「実はドストエフスキーが〈もし、神がいないとすれば〉という前提を最終的に付さなければならなかったところのものであ」ると、海老井英次（1991）は鋭く指摘している。そして、下人はこの論理に「うっかり便乗してしまった」のだというのである。

しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けてゐた勇気である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇気とは、全然、反対な方向に動かうとする勇気である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷わなかつたばかりではない。その時の、この男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に追い出されてゐた。

◆

「幸福な王子」のツバメが変えられていくのには、下人とは違って段階を踏んでいく。まず最初の夜、小さな男の子がいるお針子の元に、刀の柄にあるルビーを持っていくように王子から頼まれ、そのとおりにお使いをする。

そこでつばめは幸福な王子のもとへ飛んで帰って、自分のしたことを話しました。
「奇妙ですね。いまとても暖かい気持がするのですよ、気候はひどく寒いのに」
「それはおまえが、よいおこないをしたからだよ」と王子は言いました。そして小さなつばめはものを考えはじめましたが、やがて眠りこんでしまいました。考えごとをすると、つばめはいつも眠くなるのでした。
Then the Swallow flew back to the Happy Prince, and told him what he had done.
“It is curious,” he remarked, “but I feel quite warm now, although it is so cold.”
“That is because you have done a good action,” said the Prince. And the little Swallow began to think, and then he fell asleep. Thinking always made him sleepy.

その翌日、ツバメはエジプトに渡るつもりだった。しかし王子は、ツバメに自分の目のサファイアを、青年戯曲作家に届けるように頼む。頼みを聞いたツバメだったが、その翌日には、エジプトに渡るつもりだった。しかし王子は、さらにもう一方の目のサファイアを、小さいマッチ売りの女の子に届けるように頼む。ツバメは、やはりその頼みを聞いた。

女の子の元にサファイアを届けたツバメは、次のように言う。

それからつばめは王子のもとへ帰りました。「あなたはもうめくらにおなりです、ですからわたしはいつまでもあなたのおそばにいましょう」
「いや、小さなつばめさん」と哀れな王子は言いました。「おまえはエジプトへ行かなくては」「わたしはいつまでもあなたのおそばにいましょう」とつばめは言って、王子の足もとで眠りました。
Then the Swallow came back to the

1　海老井英次（1991）「『羅生門』論」『芥川龍之介』第1号、洋々社

Prince. “You are blind now,” he said, “so I will stay with you always.”
“No, little Swallow,” said the poor Prince, “you must go away to Egypt.”
“I will stay with you always,” said the Swallow, and he slept at the Prince’s feet.

その後、つばめは、王子の像の純金の箔をはがして、貧しい人々に届ける仕事を続けた。王子が、すっかり鈍い灰色の体になってしまうまで。

下人は、悪を許容する心へと変えられた。
つばめは、一身をなげうって与え続ける王子の助けとなった。
両者の変えられた方向が正反対であることは明かである。そしてそれは、まさに神がいない世界と、神がいる世界との違いであった。前者は奪う世界、後者は与える世界である。

3・結末

老婆の話を聞き終えた下人は、老婆の着物を奪い取り、梯子を駆け下り、「黒洞々たる夜」に消えていった。

「きつと、さうか。」
老婆の話が完(おわ)ると、下人は嘲るやうな声で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰(にきび)から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにこう云つた。
「では、己(おれ)が引剥(ひはぎ)をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする体なのだ。」
下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだやうに倒れてゐた老婆が、屍骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒(さかさま)にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々(こくとうとう)たる夜があるばかりである。
下人の行方は、誰も知らない。

下人はこのようにして、悪の中に生きていく道を選んだ。

◆

一方、「幸福な王子」では、つばめも王子の像も、死を迎える。

しかしとうとう、つばめは死期の近づいたことを知りました。やっともう一度、王子の肩へ飛びあがるだけの力が残っているだけでした。「さようなら、王子さま！」
つばめは、つぶやくように言いました。
「お手にキスさせてくださいませんか？」
「おまえがやっとエジプトへ行くことになってうれしいよ、小さなつばめさん。おまえはここに長くいすぎた。でも、わたしのくちびるにキスしなさい、わたしはおまえを愛しているのだから」
「わたしが行くのはエジプトではありません。死の家へ行くのです。死は眠りの兄弟です。そうじゃありませんか？」
そしてつばめは幸福な王子のくちびるにキスすると、王子の足もとへ落ちて死にました。
その瞬間、何かがこわれたような、ぴしりという奇妙な物音が像の内側でひびきました。実をいうと、鉛の心臓が、ぱちりと真っ二つに割れたのです。いかにもそれは恐ろしくきびしい霜でした。
But at last he knew that he was going to die. He had just strength to fly up to

the Prince's shoulder once more.
"Good-bye, dear Prince!" he murmured, "will you let me kiss your hand?"
"I am glad that you are going to Egypt at last, little Swallow," said the Prince, "you have stayed too long here; but you must kiss me on the lips, for I love you."
"It is not to Egypt that I am going," said the Swallow. "I am going to the House of Death. Death is the brother of Sleep, is he not?"
And he kissed the Happy Prince on the lips, and fell down dead at his feet.
At that moment a curious crack sounded inside the statue, as if something had broken. The fact is that the leaden heart had snapped right in two. It certainly was a dreadfully hard frost.

その後、いかにも俗物な市長と市議会議員が像を壊すさまが描かれた後、物語は次のように終わる。

「町じゅうでいちばん貴いものをふたつ持ってきなさい」と神さまが天使のひとりに言われました。そこで天使は鉛の心臓と死んだ小鳥を神さまのところへ持っていきました。
「おまえの選択は正しかった」と神さまは言われました。「天国のわたしの庭で、この小鳥が永遠に歌いつづけるようにし、わたしの黄金の町で幸福な王子がわたしを賞めたたえるようにするつもりだから」
"Bring me the two most precious things in the city," said God to one of His Angels; and the Angel brought Him the leaden heart and the dead bird.
"You have rightly chosen," said God, "for in my garden of Paradise this little bird shall sing for evermore, and in my city of gold the Happy Prince shall praise me."

王子とつばめは、神さまによって、天の国、光の国に引き上げられた。

まことに対照的な結末である。下人と、王子、つばめとでは、最後に**「垂直方向の移動」**を行うという程度の共通点はあるものの、それはまったく逆方向への移動であった。

先にも述べたとおり、それは神のいない世界と、神のいる世界、神の支配する世界の違いである。その点で、下人の移動が下向きであることにも象徴的な意味が読み取れる。

このように二つの作品を比べることによって、「羅生門」の下人が落ちていった、罪の闇の深さはますます印象づけられるのではないだろうか。キリスト教的に見れば、まさに救いから見放された弱い人間の姿である。イエス・キリストに出会えない人間の姿である。

また、キリスト教について理解するという点から見れば、王子とツバメから示されるのは、「隣人を自分のように愛しなさい」（ルカによる福音書　10 章 27 節）、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」（ヨハネによる福音書　15 章 13 節）といった教えである。それに対して、下人は自分のためにだけ生きようとした。自分の命だけを守ろうとした。その下人についての、「下人の行方は、誰も知らない。」という結末には、恐ろしささえ感じられるのではないだろうか。

宗教改革者ブーゲンハーゲンの目指した教育改革についての一考察
― ブーゲンハーゲン自身の生き方を支えたもの ―

伊勢田　奈　緒

1．はじめに

ブーゲンハーゲン（Johannes Bugenhagen: 1485-1558）は宗教改革者であり同時に教育改革者であったマルティン・ルターの良き協力者であり、ルターの思想を全面的に受け入れ、それを実践していった人物である。彼についての従来の研究では、神学の立場では彼を教会形成者として、また教育史の立場では宗教改革の時代に学校規則作りなど学校制度の組織化発展に貢献した者として取り扱われてきた[1]。本論文ではブーゲンハーゲンがルターに出会う以前もそれ以後も、生涯を通じて教育に関わり続けた理由を考察したい。結論から言えば､それは彼自身の「真の善き業」への飽くなき追求心にあり、それは究極的には「キリスト者としていかに生きるべきか」の切なる彼自身の問いにあると考えられる。このことを本論文では彼の教育改革を考察しながら、解明していきたい。

2．ブーゲンハーゲンがマルティン・ルターに出会うまで

彼は1485年6月24日、ポメルン公国[2]のヴォリンで、市参事会員ゲルハルト・ブーゲンハーゲンの子として生まれた。彼はバプテスマのヨハネにちなんでヨハネスと名づけられた。敬虔な家庭環境の中で成長したが、彼は幼年時代を「私は若い頃から聖書を愛していた。しかし、私は反キリストの暗闇の下にあり､聖書の使い方を知らなかった。」[3]と振り返っている。ヴォリンで受けた初等教育では文法を学び賛美歌を習った。1502年に生家を離れ、同年1月24日、ポメルン公国のグライフスヴァルト大学（Greifswald）[4]に入学した。当時、同大学はスコラ哲学が主流であったものの、人文主義が急速に浸透してきていた。ブーゲンハーゲンはドイツ人人文主義者として有名なヘルマン・フォン・ブッシェ（Hermann von dem Busche）に学び、スコラ哲学と人文主義の影響を受けたと考えられる。しかし彼の関心は、聖書の研究と教父研究にあり、それに伴いラテン語やギリシア語も習得した。1504年に卒業した彼は、同年秋に、トレプトウ市（Treptow）のポレモーンストラトール会のベルブーク修道院（Belburg）が庇護権を持つ市のラテン語学校の校長となった。以後、約17年間に及ぶ教師生活を送ることになる。このラテン語学校での経験は、その後の彼の一連の教育改革や教育観に大きく影響したことは間違いない。彼はトレプトウのラテン語学校赴任後まもなく、聖書の授業を受け持った[5]。授業ではカテキズムの入門、使徒信条、十戒、詩編、マタイによる福音書、テモテへの手紙などを講義した。彼は17年間、生徒や修道士たちに神の言葉を理解させ、真のキリスト者の信

1）1993年刊行の「Beyond Charity:Reformation Initiatives for the Poor」においてリンドベルク（Carter Lindberg）は従来、お決まりのブーゲンハーゲンに対する評価を嘆いていたが、最近、彼の聖書釈義の研究もなされてきている。

2）現在はポーランドに所属する。生国にちなんで「ポメルン博士」と呼ばれる

3）Karl August Traugott Vogt, Johannnes Bugenhagen Pomeranus, Elberfeld, 1897, p.4

4）同大学はヨーロッパでは古い大学の一つで、1456年に、神聖ローマ帝国とローマ教皇の勧めによってドイツで四番目に建てられた。大学は神学、哲学、医学、法律の4分野に分かれていた。

5）彼の授業の評判が良く、学生は遠くリボニアやヴェストファーリアからもやって来たという。

心を吹き込もうと努めた[6]。この時点で、既に彼は教師としての才能とすぐれた指導力があったと思われる。彼が教師となって5年後の1509年に、一つの転機が訪れた。彼の聖書の授業を受けた友人達の希望もあり、彼はカミンの司教から司祭の叙任を受けたのである。彼はトレプトウの聖マリア教会（St. Mary）において、以後、代理司祭として定期的な説教とミサの儀式を司ることになり、司祭団の一員となったのである。当時の彼はエラスムスによる聖書釈義を元に、説教をしており、エラスムスに傾注していた時代と言える。次に、ヴィッテンベルクで95箇条の提題が出された1517年に、彼にまた転機となることが起こった。ブーゲンハーゲンはベルブーク修道院長となったヨハン・ボルデヴァン[7]の依頼で同修道院の聖書講義と教父研究に携わることになったのである。すなわち、彼はラテン語学校で教育者として、教会では牧会者として、そしてさらに神学する者となったのである。この頃から、彼はキリストの教会のあり方とキリスト者の生き方について真剣に問い始める。しかし、ルターの思想を知るまでは、彼はあくまでも倫理的改革者であり、教会の教義そのものを改革するというのではなかった。彼は1517年6月19日の説教の中でベルブーク修道院の聖職者たちを叱責し、同時代の人たちの宗教生活の形式主義を批判した。そしてキリスト者として隣人愛の行為を実践する生活を勧めている[8]。彼が修道士や聖職者たちの聖書とキリストの教えの無理解を激しく指摘するのは、彼らへの愛から発せられたものであると考えられる。さらに彼は聖書の中の教会と、腐敗している現実の教会とのギャップを痛感し、ベルブークでの教育プログラムを通して、彼らの精神的改革を行おうとしていたと思われる[9]。

また、1517年から18年にかけて、ザクセン選帝侯フリードリヒ賢侯が家系史を編纂するにあたって、ブーゲンハーゲンは『ポメルン史』の編纂を担当した[10]。この作業を通して彼は修道士や修道女の不道徳や無知を改めて知り、その罪を重く受け止めている。しかし当時の彼は、キリスト者の生き方とはルターの提唱するキリストによる信仰のみの生き方ではなく、善き業と人の能力、資質や功績によるものだと理解していた[11]。彼は良い教育者であり良いキリスト者であろうとし、聖書の中に善き業を真剣に求めていたと思われる。そして、自分自身の善き業に信頼し、善き業である義に憧れていたとみられる。この時代を彼自身、「過ちの時代」[12]と記している。

ところでマルティン・ルターによる教会への革命的呼びかけは、ドイツを中心にヨーロッパ中を駆け巡り、まもなく彼の教説や書物はポメルンにも伝えられた。当時、ヴィッテンベルク大学で学んでいたペーター・スアーヴェ[13]とボギスラウ十世の息子バルニム[14]によって、ルターについての情報は直接、ポメルンに入って来た。しかし、初めの二、三年はルターの教説は広まらず、ブーゲンハーゲンはルターの改革の呼びかけと、自分自身の問いかけ－　贖宥状や教会への批判－を同一視していなかった。ところが彼にとって衝撃的で、彼のそれまでのキリスト教思想を変える決定的な出来事が起こる。1520

6）L.W.Graepp, Johannes Bugenhagen, Grtersloh, 1897, p.171

7）ボルデヴァンは改革精神を熱く持った人物で修道士の教育に力を入れるためブーゲンハーゲンに協力を依頼した。

8）While H.Meinhof, Dr.Pommer Bugenhagen und sein Wirken, Halle, 1890, p.5

9）Karl August Traugott Vogt, Johannnes Bugenhagen Pomeranus, Elberfeld, 1897, p.16

10）これはフリードリヒ賢公が宮廷牧師シュパラティンに依頼し、ポメルン関係の史料をボギスラウ十世に相談し、彼の秘書の推薦によってブーゲンハーゲンに委嘱することになったものだった。

11）「私、ヨハン・ブーゲンハーゲンは人々が贖宥状に群がって居た頃、私は一人のカトリック教徒で、ベルブークの聖職者たちに説教をしていました。熱心に自分が真のキリスト者でありたいかと話していましたが、私は明らかに、まだ間違っていたのです。」（Ibid.,p.27）

12）Ibid.,p.27

13）Peter Suawe：彼は後にポメルンの宗教改革の指導者となる。

14）Barnim：彼は後にポメルンを治め、教会改革、学校改革を行った。

年の10月の終わり頃、彼はマリア教会の主任司祭オットー・スルトウ（Otto Slutow）の家に招かれたが、そこでライプチッヒから送られてきたルターの同年8月に刊行された三大宗教改革文書の一つ『教会のバビロン捕囚』に出会う。これは、ルターがローマ・カトリック教会のサクラメント論を根本的に批判したものだが、この時、彼はスルトウに意見を求められた。彼はキリストが死なれてからたくさんの異端者が出たがこの本を書いた著者ほどの異端者は今までいなかったと感想を述べた。しかし数日後、彼の同僚たちの集まりで、「全世界が完全に目が見えなくなっていますが、この男だけが真の真理を見ています」[15]と言い改めた。これが、ブーゲンハーゲンがルターの教説を支持する者となる転向 ― 福音主義への回心 ―のきっかけだとされている。さらに、これを機に彼の周りに福音主義の輪が出来、トレプトウがポメルン公国の宗教改革の出発点となった[16]。以後、彼はルターの著作を熱心に読み始め、特に自分の問題にしてきた、(また、生涯の問題となる)キリスト者の生活における信仰と善き業の適切な関係を理解しようと努めた。そこで、彼は直接、ルターに手紙を書き、教えを請うた。すなわち、彼はキリスト者の生き方の指針を尋ねたのである。それに対して、ルターから同年11月中旬発行の『キリスト者の自由』が届き、「あなたは、わたしが生き方についてあなたに指示できると書いておられます。確かにキリスト者は規則や命令を必要としません。なぜなら、信仰の霊はキリスト者を、神が欲し、兄弟愛が要求するすべてのことへ導くからです。だから、次の事を読みなさい。すべての人が福音を信じるのではない。信仰はただ心の中で感じられるのです。[17]」と一筆添えられていた。この書物が彼に与えた影響はかなり大きかったのであろう[18]。なぜなら、彼は何もかも擲って1521年3月中旬、トレプトウを旅立ったからである。それだけ、彼は「キリスト者の生き方」についての思いが強かったとも言えよう。しかし、彼が到着したのは、ルターがヴォルムス帝国議会に召喚に応じて出頭する（同年4月2日）直前であった。

3．ルターと出会った後

上記のようにしてブーゲンハーゲンはルターとルターの教説を絶対的に支持するようになる。彼はこれ以後、1520年代前半は彼のそれまでのキリスト教観を再構築し、1520年代後半からはルターの教説を実践していくことになる。彼はヴィッテンベルク大学に学生として登録したが、同郷のポメルン出身者に対して自室[19]で詩編の講義を行うようになる。やがてこの講義は好評となり、メランヒトンの懇願もあって1521年11月3日から大学で講義をすることになった。入学して間もない彼は学生の身分のまま、大学の教師として講義を担当することになり[20]、早くもヴィッテンベルクの改革者の仲間入りをすることになったのである。ところで当時、ヴィッテンベルクではルター不在[21]の中で起こった騒動の最中であった。ブーゲンハーゲンはカールシュタットなどの急進派に対して保守的で慎重な態度を示し、彼らの急進的な改革には一切、加わらなかった。特に1522年に熱狂主義者たちが学校の教師や人々に、内在する精神には形式的教育は不必要だと説いて回った時、彼は、一教育者として教育の効果、キリスト者がこれから生きていくために教育が必要であると冷静に判断をして、急進派に対して断固、反対した。そして学校に残って

15) Daniel Cramer, Das Grosse Pomrische Kirchen Chronicon, Stettin, 1628, p.43

16) Helmuth Heyden, Kirchengeschiche Pommerns, 2nd,ed, Köln-Braunsfeld, 1957, I, p.202

17) Otto Vogt,ed..Dr.Johannes Bugenhagen Briewechsel, Stettin, 1888, p.8

18) ルターの『キリスト者の自由』についてのブーゲンハーゲンの記録はないようだが。

19) 彼の部屋はメランヒトン家の一室だった。

20) Evnst, Volk, Dr.Pormmer, Johannnes Bugenhagen, Hams, 1999, p.57

21) ルターは教皇レオ十世から破門の教勅が発せられ、またヴォルムス国会喚問とヴァルトブルク城にかくまわれていた。

いる学生達を励まし、彼は講義を続けた[22]。その後、ヴィッテンベルク市はルターがヴァルトブルクから急遽帰還し彼自身の説教によって平静を取り戻すことが出来た。ルターを中心にして改革者たちによって徐々に改革が行われていくことになった。ブーゲンハーゲンはルターの後押しもあって、1523年10月、ヴィッテンベルク市教会の主任牧師に任命される。こうして彼は、ルターの強力な片腕となり、ヴィッテンベルクを中心としてザクセン選帝侯領内の教会を宗教改革に基づいて福音主義教会としての形成、制度、組織化に全力を注ぐことになる。また、彼はルターの告悔父であり、「しばしば（ブーゲンハーゲンに）慰められた[23]」とルターが評するほど、ルターから信頼され、彼の精神的支えとなった。この頃、すでに彼は実践家としての能力を発揮している。すなわち、ブーゲンハーゲンは混乱の中にあったヴィッテンベルク市の学校に再び、生徒たちを呼び集め、学校の再建に大いに力を尽くし、また大学の講義も休むことなく続けた。1527年には、ヴィッテンベルクでペストが大流行し大学は一時、イエナへ移ることになったが、彼はヴィッテンベルクに残っている学生達に講義をし続けた。

1525年には彼は聖餐論争にも関与しルターの主張する現在説―パンの中に、パンと共にパンの下にキリストの体が、ぶどう酒の中に、ぶどう酒と共にキリストの血がリアルに存在する―を支持した。1520年代後半からは彼の実践力が花開く時となり、福音主義に基づいたヴィッテンベルク市の再生と同時に聖書の低地ドイツ語訳に取り組み、また北・低ドイツ、デンマーク、ノルウェー、リーフラント、ポメルンなどの教育改革を含む宗教改革、具体的には福音主義的教会形成と学校規則、また制度、組織化に尽力していった。ルターの死後、シュマルカルデン戦争のあった1546年以降は歴史の流れの中で彼の進む道は福音主義を守るため、妥協の道を取らざるを得なくなった。1552年から1556年に至るまで彼は純粋ルター主義者達による非難や批判の中にあったが、ルターの教えを守りつつ、ヴィッテンベルク教会において「世の終わり」に備えるように、会衆に呼びかけ続けた[24]。彼は1557年ヴィッテンベルクの説教職を退き、翌1558年、73歳の生涯を閉じた。

4．ブーゲンハーゲンのキリスト教倫理観と教育観

①「善き業」への思い

福音主義に転向する前、ブーゲンハーゲンのキリスト観はスコラ学と人文主義に基づくものであり、彼の関心は聖書研究と教父の研究にあった。それは若い学生たちに神の言葉を理解させるために必要だと考えていたからであろう。当時、彼は特に、救いはほとんど神の恩恵によってなされるが人間の側からの働きかけも少しは認めなければならないと主張するエラスムスの考え方に賛同していた。故に、彼は学生たちに「行って学び、それを行いなさい。」と言う隣人への愛の行為を積極的に勧めていた。つまり、彼はラテン語学校の生徒や修道院学校の学生達に善き業と人の努力による生活を通して、いかに生きるべきかを説いていたのである。しかし、ルターに出会ってからは聖書をとおして神の御言葉による魂の救いを、教会において、また教育の現場において教え導いていった。そして真の信仰は善きわざを伴うが、善き業によって義とされるのではないことを示そうと努めた。

キリスト者の生き方における善き業の役割の理解が、ルターに出会う前と出会ってからとは、急激に変化を遂げた[25] ブーゲンハーゲ

[22] 後にメランヒトンもルターも彼の態度に感謝した。

[23] K.Harms,Bugenhagen im Schrifttum Luthers, in: W.Rautenberg, Johannnes Bugenhagen, Beiträge zu seinem 400. Todestag, 1958, p.40,41

[24] Lohrmann, Martin J., Bugenhagen's Jonah, Minneapolis, 2012, 16p.

[25] 1521年9月にヴィッテンベルクの改革者となって初めて刊行されたポメルンの友人に宛てた『聖霊に対する罪』で、信仰による義を通してすべての罪は赦されること、そしてキリストの恩寵にのみ救いを求めなければ聖霊が救いに導く働き

ンだったが、しかし彼の考え方で特徴的なことは、共同体の中の一人一人が幸福であることへの関心であり、その思いは失われることはなかった。つまり、彼は教育の場において学校という共同体の中の生徒・学生一人一人の生涯にわたる幸福を願っていたのである。彼は、以前は、「神の言葉よりも、告解、償いの行為、善き業を尊重して」いたが、そのことに対して、誰もそれを咎めず、「自分も自らの知恵に信頼して」いたと告白している。人文主義からの決別は、ルターの教説に出会った後に書かれた彼の詩編講解に記されている。哲学者は救いをこの地上の生の快適さによって考え、そして、それは自分たちの能力によって達成できる徳を守ることだとするが、すべての救い、幸福の創造者である神はこれに反対し、この地上のすべての不信仰なことに対する諦め、それは詩編１編２節にあるように「主の教えを愛しその教えを昼も夜も口ずさむ人」、つまり、ただ神のみ言葉のみ信頼することだとした。その上で、故に詩編１編１節の「いかに幸いなことか、神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず」の幸いな人とは、私たちのために人となられた主キリストだけであるとした。そして、キリストはあなたがたが幸いな人になろうとするなら、キリストにあるすべての者のために必要な神の戒めによる重荷を昼も夜も絶えず負っておられるのだとしている[26]。彼の根幹である共同体の中の一人一人を大事にしようとする方針は、彼が後に作成する教会規定のいずれにも、貧困者の窮乏を助け、また貧困の家庭の子どもたちにも初等教育を受けられるようにする目的で創設された共同基金[27]について明記している点からも垣間見られる。

彼は、「善き業」の理解を、信仰のみ、キリストの恵みのみというルターが『善きわざについて』（1520 年刊行）において説いた教えをさらに現実に即して解釈した。たとえば、彼の十戒の第一戒の説教において「・・第一戒は信仰を、すなわち、わたしのみを神として持つようにと要求する。それは、神のために断食せよとは命令せず、他の神々を持つなと命ずる。・・・誰もこれらのことを生まれながらにして理解しない。したがって、自然をこえる恩寵が心に来て、われわれが神を父と認めること必要である。それはキリストがもたらす恩寵によって生じるのである。私のなしえないことを、神はなしたもう。わたしの生命は飲食にはなくて神のみ手と力の中にある。われわれは福音を聞いても、すぐに一切を行うのではない。赦したまえと祈らねばならない。第一戒によって神への信仰が呼び起こされるのである。[28]」と述べ、「われわれは福音を聞いても、すぐに一切を行うのではない。赦したまえと祈らねばならない」と説いている。つまり、彼が理解する「真の善き業」とは信仰のみ、恵みのみを信じ、他方、自己自身が悔い改め、祈ることによって成されると考えていたのである。

②ブーゲンハーゲンの教育観の背景と教育の実践

彼の信仰理解は全面的に信仰のみを提唱するルターによっており、信仰をキリストへの信頼として解し、唯一、「キリストは我々の義」であり、キリストは「われらの師」であるとし、「神の言葉は、正しく、世に神の誉れを説き明かし、イエス・キリストを通して人々は救われる[29]」とした。また、ルターの教育についての考え方も同様に受け入れている。

まず、彼の教育に関する考え方の背景を考えてみよう。人は誰しも自分自身の学校経験に教育を語れるのではないだろうか。ルター

をすることはないことを説きながらポメルンの宗教改革者を励ましている。（Hans Hermann Holfelder,Evangelica veritas und indicium dei,(1521),Berlin,1984,p.89）

26) Rogge, Johannes Bugenhagen. Quellen. Ausgewahlte Texte aus der Geschichte der christlichen Kirche, hrsg.v.H.Ristow u. W.Schultz, Heft 30-11, 1962, pp.48-58

27) ヴィッテンベルクにおける貧困者のための基金は 1527 年に彼の監督の下に創設されている。

28) Rogge, Johannes Bugenhagen. Quellen. Ausgewahlte Texte aus der Geschichte der christlichen Kirche,hrsg.v.H.Ristow u. W.Schultz, Heft 30-11, 1962, pp.60-64

29) Karl August Traugott Vogt, Johannnes Bugenhagen Pomeranus, Elberfeld, 1897, p.95

自身も、マンスフェルト、アイゼナッハのラテン語学校の約10年間と、マグデブルクの修道院学校一年間、そして大学で学んだ中で[30]、学校教育では「喜んで遊びながら」学ぶ必要、また少年ばかりでなく少女の教育、また教員も男性教員だけでなく、女性教員の必要についても考えていた。ルターの教育の実践の考え方の背後には宗教改革的神学の徹底としての「神の教育」[31]があった。ブーゲンハーゲンも自分自身の学校で受けた教育の経験をまた自分自身の教員経験を鑑みながらルターの上記の考えを受容したと考えられる。次にブーゲンハーゲンが現実に行った教育の改革の背景を考えてみよう。ルターの宗教改革運動はルターの神学上の新しい考えに始まって、次第にヨーロッパ社会の政治や経済上の変動まで広がっていき、ヨーロッパの教育体制にも大きな影響を与えていった。プロテスタンティズムがドイツの諸地方にさらに伝播していくために学校教育を福音主義に基づいて新しく立て直していくことが必要であった。このような中でブーゲンハーゲンが教育改革に乗り出し、彼の本領を発揮した。振り返れば、彼はヴィッテンベルクの騒動の最中にあってもまた、ヴィッテンベルク大学がペストの流行でイエナに移った時にも、教育活動を守り、継続し続けた。彼には教育者としての自負と信念があり、教育の本来のあるべき姿を追い求める熱い思いがあったと考えられる。

彼が教育の改革を含む宗教改革を行ったハンザ同盟[32]の諸地域は、特にラテン語学校や商業に従事している子弟が通う、読み、書き、計算、初歩ラテン語を教える世俗的民衆教育機関が発達していた。しかしながら、学校は学問を学び、いかに生きるかを身につける機関ではなく、生活や仕事に実質的に技術を身につけ、訓練する機関となっていた。また本来、学校は中世以来、聖職者階級の一員を養成する所であったが、ローマ教会の聖職者階級そのものが崩れ始める中、相関関係でその養成機関である学校も衰え、また学問への意欲も失われていた。すなわち、聖職者階級が学校教育から手を引いたら、だれが学校教育を率いていくのかという担い手が不在になりそうな危機的状況に陥っていた。おまけに、カールシュタットなどの急進的改革者が、神との神秘的な交わりを強く主張するあまり、信仰において学問など不要であるとする極端な考えをもつ有様で、ますます学校教育が軽んじられる状況にさらされていた。

ルターは子どもに教育を受ける権利を認め、まず、両親に、次いでその委託のもとに都市が教育する義務を負うという基本に立つ教育を奨めようと呼びかけ、また学校が設立されても、子どもに教育を受けさせることに不熱心な親たちに教育の重要性を訴えた[33]。一方、メランヒトンは、ヴィッテンベルク大学をはじめとする大学改革において、人文主義の主張する人格形成の教育を中心に据えて、ギムナジウム教育を勧めた。ルター等改革者は、1520年代には教育の衰退について非常に危機感を感じたが、1530年代に入ると、学校再生を図るために、具体的構想である学校規則を作成し、具体的にそれを実践していった。その中心にいて手腕を発揮したの

30) ルターは第一に、徹底的な暗記の無味乾燥、またこれに伴う体罰に対する陰気な印象、第二に、アイゼナッハの教師の生徒に対する配慮が記憶に残っていたようである。

31) ルターは子どもを教育することは、神の命令に従うことであり、また感謝の表現することであるとし、「あなた自身がどれだけ神から善きものを与えられてきたか、そして今もこれからも、無償で与えられているか」と語り、故に息子や娘の教育を通して神に仕えることによってこれらの贈り物に応えることを説いた。(Martin Luther, Sammtliche Schriften, ed.by Johann Georg Walch, XLVI, St.Lois, 1883, p.254)

32) ハンザ同盟の中核を占める北ドイツの都市は神聖ローマ帝国の中で皇帝に直接忠誠を誓う帝国都市であり、相互に独立性と平等性を保つ緩やかな同盟だったが、経済的連合にとどまらず、時には政治的・軍事的連合として機能した。しかし同盟の中央機構は存在せず、同盟の決定に拘束力も弱かったので、政策においてはそれぞれの都市の利害が優先された。リューベック、ハンブルク、ブレーメンなどかつてのハンザ同盟の中心都市は「自由ハンザ都市」を称した。

33) ルターは1524年に「ドイツ全市に参事会員にあてて、キリスト教的学校の設立について」、1530年には「人々は子どもたちを学校へ通うべきであるという説教」を通して呼びかけた。

がブーゲンハーゲンであった。

ルターは宗教改革運動を直接自ら出かけて指導したわけではなく、ヴィッテンベルクにあって、各地へ散った学生や、同僚を手紙で指導し、あるいは説教者を派遣し、著作をもって指導をしたが、ブーゲンハーゲンは自ら、諸都市へ出向き、学校改革を含む都市改革運動に取り組んだ[34]。その特徴はあらかじめ進んでいた改革運動に対して、市参事会と協力しながらそれを組織化し、行政に組み込み、制度化していくという取り組みにある。彼の手による教会規定はそのほとんどの都市において共通点がみられる。まず、ほぼ三分の一が教育改革に当てはめられている。続いて彼の教会規定は礼拝規定、教職規定、最後に貧民救済規定へと続く。カトリック教会法が教職規定と裁判規定に大部分をさいているのと比べると、いかに彼がキリストによって罪赦された者により、愛の秩序の形成に心血を注いでいたが察せられる。

③ブーゲンハーゲンが考える教育の究極的目的について

ルターと同様、ブーゲンハーゲンも一人の子どもの教育を現在だけでなく、その将来をも視野に入れて構想していた。彼は現在の子どもは将来、その都市をそれぞれの賜物を生かして繁栄させる存在だと考え、共同体の中ですべての者に教育を受けさせることが不可欠だと考えていた。また、既述したとおり、彼は共同体の中の一人一人の一生の幸福を考えていた。さらに彼は、洗礼を受けた者がキリスト者として基本的にいかに生きるべきかを学ぶところが学校であると理解していた。20 世紀の神学者ボンヘッファー（Dietrich Bonhoefer：1906-45）は、「安価な恵みはわれわれの教会の宿敵である」とし、「安価な恵みとは投げ売りされた赦し•慰め•聖礼典」、「教説•原理•体系としての恵み」、「罪の義認」、「自分自身で手に入れた恵み」、「悔い改め抜きの赦しの宣教」等であり、「安価な恵みは服従をぬきにした恵み・十字架を抜きにした恵みであり、生ける・人となったイエス・キリストを抜きにした恵みである」とドイツ教会の安価な恵みに安住していたあり方を痛烈に批判したが、ブーゲンハーゲンは安っぽく神の恵みや罪の赦しについて語るのではなく、律法と福音の関係を理解し、キリストに従って生きることを真剣に問い、ボンヘッファーが言う「高価な恵み」を受けるための戦いをし続けたと言えよう。そして彼はそのために、キリスト教信仰の基本を教え、洗礼後の信仰を守るための教育を受けさせること、また、すべての者に教育を受けさせるために特に、共同基金規定を整えることに力を注いだ。

ブーゲンハーゲンの教会規定とそれに基づく教会形成、また学校改革の活動はまさに、ルターの改革思想の具現化と考えられる[35]。少し、教会規定について述べよう。ブーゲンハーゲンが最初に改革に乗り出したのはブラウンシュヴァイクからで、1528 年にブラウンシュヴァイク市参事会の牧師であった H. ヴィンケル（Heinrich, Winkel）により「市のすべての教会の共通の牧師、説教者」に任じられた。彼は、同市で説教者、聖書解釈者、牧会者、教育者、法律問題の助言者、共同審理者、組織作り者として多方面の活動をした。しかし、特に彼が行った、またこれ以降の彼の活動の核となった仕事は、教会規定作りだった。先ず、彼が教会規定を作成し、それを市参事会員、市参事会員に選ばれうる 14 のギルドの長たち、5 市の行政区民の 28 人の代表等により確認され、1528 年 9 月 6 日、全市の教会でこの規定を導入することになった。次に同年 7 月に、すでにハンブルク市参事会から宗教改革のために教会規定の導入の

[34] ブーゲンハーゲンは組織力に恵まれ 1528 年、招かれてブラウンシュヴァイクに出かけていき、教会規定を設けつつこれを指導し、続いて 29 年ハンブルク、30 年リューベック、34 年には生まれ故郷ポメルン、さらには 37 年と 39 年にはデンマーク、42 年にはシュレスヴィッヒ・ホルシュタインと出かけてドイツ諸都市、北欧の改革に取り組んでいった。

[35] ブーゲンハーゲンが低ドイツ地方の境であるブラウンシュヴァイクからノルウェーに及ぶ地域において福音主義教会の形成に貢献した時期は 1528 年から 1544 年に及ぶ。

依頼があり、またルターの推薦もあって、彼はハンブルクへ向かうことになった。1528年10月から彼が取り掛かった、ハンブルク教会規定はブラウンシュヴァイク教会規定を単純にそのまま使用するわけにはいかず、約三分の一を採用した。彼の滞在は翌年の6月9日までの約8ヶ月だったが、その間、教会規定作成と共に、説教、ヨハネ・ラテン語学校の設立、カトリック教会から福音主義への変化に伴う教会生活、社会生活の諸問題への助言などを行った。以上の経緯の中で出来た教会規定であるが、この教会規定には三つの神学的基本路線がある。第一に神の言葉の宣教、第二に教会員の教育、第三にキリスト教的愛を根底とする貧困者救済である。彼はブラウンシュヴァイク教会規定の序文に、子どもたちのために良い学校を設立すること、神の言葉を人々に純粋に提供し、教養ある人々にラテン語の講義や聖書の釈義もできる説教者を採用すること、またそのような説教者や教会の奉仕者が支え、貧困者の窮乏を支える共同基金を教会の財産やその他の寄進によって創設することが記されている。彼の能力は神学と実践をうまく一体化させることにある。彼の教会規定の特徴は、教会規定を単に各教会だけのものとしてではなく、都市全体の中での教会が機能できるように作成していることである。すなわち、ブラウンシュヴァイクの規定にしろ、ハンブルクの規定にしろ、その市全体の統一した中での福音主義教会の形成を考え、そのためのキリスト教に基づく規定となっているということである。故に、彼による教会規定は、宣教、教育、社会福祉の三つについての規則から成り、治安、行政、司法、外交を担当している俗権と共に、キリスト教の精神に基づいた総合的な都市作りとなっていたと言える。

彼の工夫はすべての人に初等教育を受ける機会を与えることであるが、それはルターも提唱していることである。福音主義では、神の下に万人は平等であり、人間の現在の救済はキリストにおいて明らかにされた神の意志、つまり福音を信ずることによってのみ成立するとした。しかし神の意志を直接知るためには聖書を読めることが先決であり、そのためにすべての人が行ける学校を用意いなければならないとした。故に、自国語の学校のシステムはラテン語を学べない者でも基本的な教育を受けられる学校を創立することが必要であった。また初等教育に関しても、ルターと同様に、男子の学校と女子の学校を創設することを提案した。男女を分けた理由は、後で述べることになるが、それまでの教育に関して男女に差があったことや当時の男子と女子では、教育にかけられる期間が異なるという点などがあげられよう。第二に、男子の学校はルターの教育プランに即したものであれば、従来の制度や施設を採用した。学校長は市参事会あるいは聖職者から選ぶことにした[36]。カリキュラムについては、ハンブルク規定では教師は生徒にキリスト者であることの意味や賛美歌を教えることとし、リューベック規定ではカテキズムや新約聖書の一部、賛美歌を学ぶこととした。またブラウンシュヴァイク規定では、十戒、信条、主の祈り、2つのサクラメント、賛美歌を学ぶこととした。もちろん、彼らにキリスト教の基本的なことを学ばせると共に、読み書きも学ばせることになっていた。男子校では宗教教育が基本であり、初等教育の究極的プログラムの目標は洗礼を受けている者としての理解と、またキリスト者として生きるための準備をすることであった。第三に、彼が特に着手したのはすべての女子に教育を受けさせることであった。もちろん、女子教育には制限があって、ラテン語学校や、大学への門戸を開いてはいなかった。しかし、彼は女子の初等教育の確立を主張した。彼が男子の学校よりも女子の学校教育を重視したのは、当時、女子への教育が一般的ではなかったからである。女子が正式な教育を受ける手段は主として女子修道院へ行くか、宮廷で女官として仕えるかであった。

36) これは1525年の農民戦争を経て当局側に学校の設立、維持を求めた結果だと考えられる。また彼は給与体系を作ったが、教師の給与は生徒による授業料で、共同金庫からの資金は収入を補うために使うとしている。校長、校長の助手は校舎内に住む所を提供することになっていた。

彼はドイツの市や村に少なくとも一校は女子のための学校が必要だとした[37]。また女子の学校の教師は女性でも男性でも良いが、女性の方が望ましいと考えていた。しかし、あくまでも大事なことは女性であれ、男性であれ教師は聖書を愛し、それに親しみ、生徒たちをよく面倒を見ることができる人物を望んでいた[38]。彼自身もそのような教師であったにちがいない。彼は教師職というものを非常に大事な専門職と考え、1543年のブラウンシュヴァイク－ヴォルフェンビュッテルの学校規定において、教師の給与は授業料に加えて共同金庫から決まった額を支払うべきだとし、適切な報酬であること、そしてその確保を目指していた。女子教育の教育課程の最終目標は、彼女たちが字を読めることであった。この目的達成のため、彼はカリキュラムを作成したが、少年と同様に、基本的には宗教教育に重点をおいた。少女たちが、十戒、信条、主の祈りを書き、理解し、洗礼と聖餐の意味を学ぶことを期待した。ブラウンシュヴァイク－ヴォルフェンビュッテルの学校規定ではこれらの導入としてルターの小教理問答を学ばせることも言及している[39]。少女たちには新約聖書からの信仰、愛、忍耐、十字架などについての聖句を覚えることを課した。また詩編を読んだり、暗唱したりすることも勧め、一方、教訓的な歴史的出来事などを勉強するように示唆した。最後に讃美歌を覚えることをカリキュラムの重要なことだった。音楽教育がとりわけ強調されるのは「音楽を神の賜物」の一つとして大事にしたルターの音楽尊重をブーゲンハーゲンも支持したことによるものであろう。ブーゲンハーゲンは少女たちが将来、キリスト者として生きるために、このような学びは役立つことであると信じた。初等教育を終了した時に、彼女たちが学校で学んだことを心に刻みつけていることが大事だと考え、覚えさせることに重点を置いた。以上のように、女子のための学校カリキュラムは少年たちよりもより広範囲であった。これは、少年たちの多くは初等教育の終えてもさらに勉強できる期間や機会があるが、少女たちは初等教育以外、学ぶ機会はないと考えたからである。故に彼は、少女たちに主としてキリスト教教育に関するカリキュラムを詰め込もうとしたのであろう。ブーゲンハーゲンはすべての者に教育が必要なことを強調する一方、一般大衆の現状を把握していた。彼は如何なる職業の者も、如何なる家族構成であっても、また性別も、貧富の差も関係なく教育を受けられる道を開こうとした。他方、初等教育以上の教育に関しては個人の能力や将来にさらなる教育が必要か否かによるべきだと考えていた。故に、将来、家庭の主婦になる彼女たちには聖職者や法律家のための勉

37) もし人口が多い町なら1箇所以上必要だとした。たとえば、ブラウンシュヴァイクには4学校、ハンブルクには各教区に1学校、リューベックには3学校は必要だとした。その学校の所在地についても言及し、町や村の中央の便利な所に位置することを示唆し、それは少女たちが困難なく学校を行き来できるからだとしている。このような生徒たちへの安全の配慮は彼の教員経験から発したものだと考えられる。彼は、女子の学校の教師は女性でも男性でも良いが、女性の方が好ましいと考えていた。

38) 教師の採用と解雇には男子と同様、市参事会あるいは市の代表が行うとしている。教師の給与は男子の学校と同様の額とし、教師の住居は無料とし、一般的には学校内に寄宿することとしている。教師の給与は生徒の授業料でまかなうこととしているが、教師は短期間で生徒に知識を身につけさせるので、生徒の親はできるだけ授業料を多く支払うように促している。実際に、ブーゲンハーゲンが主張するように女子の学校の方が多く授業料が払われていた。彼は、女子は多くの男子に比べて短期間しか学校に通わない故に、両親は短期間なら授業料を支払うことが可能だろうと考えたのであろう。授業料は年4回、支払われた。尚、1543年のブラウンシュヴァイク－ヴォルフェンビュッテルの学校規定においては、彼は刷新を図り、教師の給与は授業料に加えて共同金庫から決まった額を支払うべきだとした。

39) 小教理問答は、初め各家庭の壁に貼られることを期待して7枚組のポスターの形で印刷された。宗教改革者たちは2世紀から5世紀まで盛んに行われた、カテケーシスを導入し、人々を、子どもたちを教育する必要を強く感じ、福音主義に基づくカテキズムが多く出された。ブーゲンハーゲンのものもあるが、ルターは早くからその必要性を感じ、「小教理問答」を1529年に出版している。これは文字通り平易な言葉の問答形式で書かれ、若い人、民衆に確かな福音と信仰による生活を教えるためであった。

強は必要ないのだと・・認識していた[40]。彼が構想する女子の学校では、神の言葉を習得し、迷信を信じない、意固地な人間ではない、人の役に立ち、有能で、明るく、親しみやすく、従順で、敬虔な妻であり母となる生徒を育てることであった。そして彼女たちが敬虔な生活の中、しっかり家事をして、子どもを育てられることを期待した。そのようにして育てられた子どもたちはやがて、洗礼を受け、良い市民となり、さらに、彼女たちの子どももよく育てられるといったように教育の祝福は続くことになると考えていた。たとえ、そのような効果が個々人に達成できなくても、少女たちの教育は支援すべきだとした。なぜなら、それは神の御心であると信じていたからである。彼が初等教育は男子も女子も必要であるとした根底にはルターの万人祭司の考え方とともに、学校教育の本来の意味をよく理解していたことにある。

彼は洗礼を受けた者が信仰を守る教育を受けさせるべきだと強く主張した。これは彼が生涯、自分自身に問うていた「キリスト者としていかに生きるべきか」に関わってくる。ブーゲンハーゲンの各教会規定によれば、子どもが誕生したら、洗礼（幼児洗礼のこと）を受けさせることが定められている。彼は洗礼を受けた子どもはキリストに従う者としなければならないと理解していた。その洗礼を受けた子どもが神の恵みの下に、善いことと悪いことの判断ができず、人の判断で悪魔に導かれた時、悪い慣習、悪い行動などから回心させなくてはならないのであって、故に教育は、悪魔の働きと闘う手段としてあり、教育を通して子どもたちが神の言葉の真実を教えられ、キリストに従う者となれると考えていたのである。彼にとって洗礼と教育は、密接な関係があり、キリスト者の生活に大きく影響するものだと考えていた。彼は、子どもはキリスト教に基づく教育を通して正しい倫理観を持ち、信仰を維持し、一人の人間として成長していけるのだと信じていたと考えられる。さらに親が子どもへの教育を怠ったり、また教育機関が壊れていたら、子どもは生き方を誤ったり、神の言葉を誤ってしまうであろうと考え、又ルターと同様、そういった教育を考える際、効果的な教育システムとは教会と国家を支える俗権の指導者が必要だと考えていた。

ブーゲンハーゲンはオールラウンドな視点から学校規定を考え、メランヒトンのようにラテン語学校だけを取り扱う学校規定だけでなく、ドイツ語の少年学校、少女学校、さらに Lectorium, すなわち、大学予備校、そして大学に至るまでの非常に普遍的な教育を構想し学校規則を作った。もちろん、彼が実際に従事していたラテン語学校についての学校規定は非常に詳しいものではあるが、しかし、注目すべき点は、彼はひとりひとりが大学を通して教育過程を追い求めることが重要だと考えているわけではなかったことである。生徒が定期的に、特に 12 歳と 16 歳の時、自分の学校生活を続けるか、辞めるかを試す試験をすることを提唱している[41]。これは既述したとおり、彼が最も才能がある者だけが大学へ進めばよいと考えていたからであろう。彼の構想の中では能力だけが上級学校へ進学する基準であり、貧困者の学生も能力があれば無料で学校へ行けることを許可していた[42]。彼は繰り返し、教師に対して学生が学問を必要としているか、能力があるかを見分け、学生の幸福のために自分の仕事に励むように主

40) ブーゲンハーゲンは少女たちは一年か、多くて二年提案したカリキュラムを習得できればよいと主張した。毎日の学習時間は学校の規定において変わっている。たとえば、ブラウンシュヴァイクやハンブルクの学校規則では一日一時間か、二時間を学習時間としたが、リューベックではもっと多く学ぶことを許可した。ブラウンシュヴァイク－ヴォルフェンビュッテルでは朝二時間、午後二時間とした。その日の残りの時間は復習の時間にあて、また、主婦になるため、母の手伝いをしたり、また、遊ぶ時間にあてた。これは彼が教育プログラムには自由時間も効果的だと考えていたからであろう。ルターは学校だけが子どもを適切に育て、家庭の中の仕事を治めることができると主張したが、ブーゲンハーゲンは、ルターの主張に大部分は賛同し、女子の学校に通わせることの効果を記述している。

41) E.Sehling, Die evangelischen Kircheordnungen des XVI., Jahrhunderts, V., Leipzig, 1913, p.498

42) Ibid., IV, Leipzig, 1911, p.333

張した[43]。

以上、述べてきたようにブーゲンハーゲンが考える教育の究極的目的は洗礼を受けた子供がキリスト教の教えを学び、信仰を身につけることであった。そして、彼はそのようなキリスト教教育によって、一人の人間が将来、共同体の中でキリスト教信仰の下、幸福に生きていくことができると確信していたのである。

5．総括

本稿では宗教改革運動の中で全生涯を通じて教育に関わったブーゲンハーゲンの生涯を見ながら、彼の教育観を支え、彼が追求していたテーマ「キリスト者としての生き方」がルターに出会うことによってどのように変わり、また彼の教育の改革をどのように進めていったかを考察した。

ブーゲンハーゲンのヴィッテンベルク市における主任牧師としての経験と19歳でトレプトウ学校長になって以来、ヴィッテンベルク大学、コペンハーゲン大学などの教育機関に長い年月、携わった経験は、他の宗教改革者とは異なる彼だけのバックグランドであったと言えよう。その経験から得たものは、語り尽くせないほど、大きなものだったと考えられる。教会の改革と共に学校の改革を行うことが出来たその原動力は、彼が常に、キリスト者としての信仰生活を守りつつ、いかに生きるべきかという目に見えない問題を追い求めてきたことにあると考えられる。そしてそれが、目に見える形として、彼の経験と相まって、大きな働きを為し得たのではないだろうか。もちろん、ブーゲンハーゲンが働いたのは、都市が中心であり、限定されたものであったかもしれない。しかし、それは都市出身の若者が改革運動の原動力になり、またその都市を指導していく力になったに違いない。また文字が読めない者が読めるようになって福音主義の信仰が広く流布していくためには学校の果たす役割は大きかったことも事実であろう。現在も北ドイツ、北欧はルター派の教会が圧倒的であるが、これは彼の学校改革を含む教会改革の貢献によるところも大きいと考えられる。しかし、繰り返すことになるが、ブーゲンハーゲンの学校教育へのあふれる情熱は、彼の中の真の善き業への追求とキリスト者としての生き方への問いから生まれたのであり、それが彼の力となって、彼はキリスト教信仰の基本を学び、洗礼後の信仰を生涯、続けられることがすべての人の幸福への道であると信じ、教育改革活動に生涯をかけて関わり続けたと考察する。

－　愛の実践を伴う信仰こそ　大切です。－
ガラテヤの信徒への手紙　5章6節

《一次史料》

Karl August Traugott Vogt, Johannnes Bugenhagen Pomeranus, Elberfeld, 1897

L.W.Graepp, Johannes Bugenhagen, Grtersloh, 1897

While H.Meinhof, Dr.Pommer Bugenhagen und sein Wirken, Halle, 1890

Daniel Cramer,Das Grosse Pomrische Kirchen Chronicon, Stettin, 1628

Otto Vogt,ed.. Dr.Johannes Bugenhagen Briewechsel, Stettin, 1888,

K.Harms, Bugenhagen im Schrifttum Luthers, in:W.Rautenberg, Johannnes Bugenhagen, Beiträge zu seinem 400. Todestag, 1958,

Hans Hermann Holfelder, Evangelica veritas und indicium dei, (1521), Berlin, 1984

Rogge, Johannes Bugenhagen. Quellen. Ausgewahlte Texte aus der Geschichte der christlichen Kirche, hrsg.v.H.Ristow u.W.Schultz, Heft 30-11, 1962

Frederick Eby,Early Protestant Educators,NewYork,1931

『ルター著作集』第一集第5巻、聖文舎、1967

『ルター著作集』第一集第9巻、聖文舎、1973

43) Ibid., p.368

《参考文献》

Hendel, Kurt, “Johannes Bugenhagen, Organizer of the Lutheran an reformation” in Lutheran Quarterly vol.18, 2004, 43-75

Irene Dingel und Stefan Rhein, Der Spate Bugenhagen, Leipzig, 2011

Werner Rautenberg, Johann Bugenhagen, Berlin, 1958

Irmfried Garbe und Heinrich Kroger, Johannes Bugenhagen,Leipzig,2010

Helmuth Heyden, Kirchengeschiche Pommerns, 2nd,ed, Köln-Braunsfeld, 1957

Evnst,Volk, Dr.Pormmer, Johannnes Bugenhagen, Hams, 1999

E.Sehling, Die evangelischen Kircheordnungen des XVI., Jahrhunderts, V., Leipzig, 1913

Martin J.Lohrman, Bugenhagen’s Jonah, Minneapolis, 2012,

倉松功『ルターとバルト』ヨルダン社、1988

倉松功『宗教改革、教育、キリスト教学校』聖文舎、1984

R. シュトウッベリッヒ『メランヒトン』倉塚平（訳）、聖文舎、1971

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』創文社、1960

『ルター著作集』第一集第二巻、聖文舎、1963

『ルター著作集』第一集第三巻、聖文舎、1969

徳善義和『キリスト者の自由』新地書房、1985

金子晴勇『ルターとその時代』玉川大学出版部、1985

『ボンヘッファー選集』Ⅵ：告白教会と世界教会、森野善右衛門訳、新教出版社、1968

インタビュー
鈴木幸子先生に聞く

聞き手　伊勢田　奈　緒

— 静岡英和学院大学に来られたきっかけは？

結婚して静岡県に住むことになり、県内でキリスト教主義の学校で働けるところを探していました。

— チャペルを振り返って？

先ず、驚いたのはクリスチャン教員や学生が奨励を行っていたことです。私はそれまで礼拝は牧師だけがお話をするのだと思っていましたから。それで、先生方や学生たちがどのような思いをもっているのか、に触れることができて良かったです。そして、嬉しかったのは自分の思いや子供への思いについて自分もチャペルで話す機会が与えられたことです。

— 静岡英和学院大学と建学の精神について？

キリスト教で大事にされている聖句が建学の精神になっていることに感激しました。私が属しておりましたコミュニティ福祉学科はまさに、この聖句に基づいて進まなくてはならないと思います。

— キリスト教に関する行事での思いでは？（スチューデント・リトリートやクリスマスなど）

一昨年、昨年と関わりましたISEDA劇団のクリスマスに行った劇です。（これは、クリスマス礼拝の後、私こと、宗教主任が脚本を書いたものを、数人の学生たちが演じたり、また音楽・背景などを担当してくれたりしましたね。鈴木先生は演出指導をしてくださいました。ちなみに、一昨年は『くつやのマルチン』、昨年は『きよしこの夜物語』でした。）この劇に関わることによって、学生たちのほかの一面を見ることができたことは有意義でした。劇を通して、学生たちと伊勢田先生と心を一つにしてできたことは良かったです。とにかく、楽しかった！

— 先生の好きな聖書の箇所と讃美歌を教えてください。

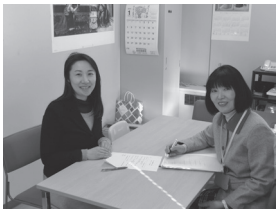
好きな聖書箇所は、コリントの信徒への手紙二　12章9節「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」です。10年程前、母がハガキに書いて私に送ってくれた聖句です。当時、母自身が病の中にあったため、母の心に響いた聖句だったのだろうと思います。この聖句が書かれたハガキは、今でもなんとなく目に入るところに貼っています。ものごとが上手くいかない時に、神様にゆだねることを思い出させてくれます。

好きな讃美歌は讃美歌二編219番「さやかに星はきらめき」です。

この讃美歌は、早稲田教会の聖歌隊でクリスマスに歌いました。クリスマスが近づくと口ずさむ一曲です。

— これからの静岡英和学院大学へ贈る言葉

キリスト教主義を貫き通してほしいと思います。



インタビュー
木下ゆり先生に聞く

聞き手　伊勢田　奈　緒

－　静岡英和学院大学に来られたきっかけは？

英和に来る前はAIDS/NGOや国際協力に関わる仕事をしていましたが、そういった現場では栄養支援のニーズがあるにも関わらず、食の専門家の人材が少ないという現実を目の当たりにしました。患者さんや困っている人々の生活の視点に立って考え、広い視野でがんばってくれる栄養士を育てたいという気持ちがあり、英和の建学の精神に魅かれました。

－　チャペルを振り返って？

学生や教職員個人の信仰や考え方はいろいろだと思いますが、静かに自分と向き合い、お話を聞くという時間を持つことは、とても貴重な時間だと思いました。パイプオルガンの演奏もとても心に響き、癒されるひと時でした。

－　静岡英和学院大学と建学の精神について？

建学の精神の具現化することの重要性と難しさを実感したのは、ボランティア委員長として大学開学10周年のボランティア活動報告書を作成した時でした。ボランティアセンターの職員や学生たちが、毎日毎日積み重ねている地道な働きと、謙虚な気持ちで取り組み続ける姿勢は、英和の最大の宝であり、魂だと思いました。せっかく英和の建学の精神を形にしている貴重な取り組みですので、大学全体でとして重要性を再認識して支援体制を整えていただきたいと思いました。

－　キリスト教に関する行事での思いでは？

リトリートとクリスマスです。キャンドルサービスが好きでした。

－　先生のお好きな聖書の箇所と讃美歌を教えてください。

好きな聖書の箇所は学院聖句です。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」（新約聖書 ルカによる福音書10章27節）

好きな讃美歌は「どんなにちいさいことりでも」（讃美歌21の60番）です。

－　これからの静岡英和学院大学へ贈る言葉

静岡英和につながる学生や卒業生、地域の方々のために、「愛と奉仕の実践」をされていかれるのを応援しています。

	2013年度　　チャペルとキリスト教行事
3月	卒業礼拝：出村彰（宮城学院元理事長）牧師「霊も魂も身体も守られて」(14日10時半～) 教職員全体会:出村彰「成長させてくださったのは神です－北の国の事例から」(同日13時～14時半) W 303
4月	礼拝（毎週水曜日） 始業礼拝・武藤元昭学長「本学で得るもの」(3日) イースター礼拝：伊勢田奈緒「上を向いて歩こう！」(10日) スチューデントリトリート（天城山荘一泊､伊豆シャボテン公園）(大学17～18日／短大18～19日) 伊勢田奈緒「仕方がある！」(25日)
5月	伊勢田奈緒「やめることがリクリエーション」(1日) 学生礼拝：「リトリートを振り返って」見城愛基（人間1年）林玉善（人間1年）大石玲奈（現コミ1年）丸山かなみ（食物1年）斉藤はるな（食物1年）木村友紀（食物1年）(8日) 橋本克彦（日本キリスト教団牧師）「人生やりなおせる！」(15日) クレイナー先生「Giving Back To God」(22日) 武藤元昭学長「若き日に」(29日)
6月	伊勢田奈緒「敵は高慢」(5日) 柴田敏先生「愛によって互いに仕えなさい」(12日) 伊勢田奈緒「ここではない、どこかへ」(19日) 学生礼拝：「これまで、今、これから」黄かせい（人間2年）小澤真（コミュ福2年）服部桃（コミュ福3年）海野愛（現コミ2年）(26日)
7月	第5回ワンコインコンサート開催（2日～5日） 見平隆先生「愛すること、愛されること」(3日) 伊勢田奈緒「『ありがとう』だけでは足りない」(10日) 武藤元昭学長「更なる上を」(17日)
8月	
9月	武藤元昭学長「種を蒔く人」(25日)
10月	伊勢田奈緒「『である』と言われる方」(2日) 柴田敏先生「苦難の日、わたしはお前を救おう」(9日) ハリントン先生「Gary Speed」(23日) 伊勢田奈緒「光の中でピンチをチャンスに！」(30日) 第5回クリスマスカードコンテスト（応募期間：1～30日）
11月	鈴木幸子先生「二重の肯定」(6日) 武藤元昭学長「神の倣う者」(13日) 創立記念礼拝：近藤勝彦牧師（前東京神学大学学長）「仕えられて湧く仕える力」(20日) 伊勢田奈緒「イエスの愛のパワー」(27日) 楓祭に参加（クリスマスの部屋【グロリア】宗教部＋学生有志）(2，3日) クリスマス・イルミネーション点灯（11月29日～）
12月	第6回ワンコイン・クリスマスコンサート開催（4～6日、9、10日） 学生礼拝：「自分を見つめて」毛ぎ国（人間1年）松下広大（人間1年）高田果穂（人間1年）若林優加（コミュ福1年）グエントウック･ユエン（食物1年）秋定杏奈（現コミ1年）片平圭（現コミ1年）島本高子（現コミ1年）(4日) 柴田敏「慰められ、励まされる」(11日) クリスマス礼拝・クリスマスメッセージ：伊勢田奈緒「もしかしたら！」／クリスマス劇『きよしこの夜物語』(ISEDA劇団【小澤真（コミュニティ福祉学科2年）他有志学生】(18日) クリスマス・キャンドル・サービス＋クリスマス祝会（18日午後6時～W 303にて）
1月	伊勢田奈緒「新しいステージ」(8日) 武藤元昭学長「神のために（15日）

静岡英和学院大学・短期大学部　教職員研修会

2013 年 3 月 14 日

発 題　出 村　　彰

成長させてくださったのは神です―北の国の事例から

1）『キリスト教学校教育同盟百年史』（年表・通史・資料　2009、2011）

年表 1 頁　1887 年　静岡英和女学院（静岡女学校）

2009 年、プロテスタント（横浜開港）150 年　　最初のプロテスタント宣教師たちの来任〔キリシタン禁教下！〕

1863 年からの 1870 年代には 15 校、1880 年代にほぼ倍近い 25 校　〔TG、MG 仙台　1886 年〕

しかし、1990 年代からキリスト教学校教育同盟成立（1909）まで、僅か 10 校前後

2）時代背景　19 世紀 “The great century of Christian mission”（Kenneth S. Latourette 教授）

＜歴史の振り子＞

①16－17 世紀　宗教改革の時代＝信仰分裂の時代　信仰の熱意→宗教戦争にまで発展SOUL

17－18 世紀　理性の時代＝合理主義革命（教義・社会・政治）　MIND

18－19 世紀　感情の時代＝ローマン主義（人間の本質は心性）　HEART

19－20 世紀　歴史意識＝進歩・発展へ（自然科学・進化論、社会科学・唯物論）　BODY

② 19 世紀＝リヴァイヴァル（信仰覚醒・信仰復興）の時代

メソジスト派の成立（18 世紀後半のイングランド→新大陸へ）、バプテスト教会によるビルマ伝道など

③リヴァイヴァルの伝道方策　　信条（creed）＜心情（deed）

広漠たる新大陸開拓地でキャンプ・ミーティング　　“circuit riders” 巡回伝道者

強烈な「回心」説教　　“hellfire and brimstone sermons” 心理的・肉体的「異常現象」を伴う「体験」宗教

新生の可視的印としての洗礼（使徒言行録　8 章 26 節以下「エチオピアの宦官の受洗物語」）

その時、その場で―長い信仰〔教理〕問答教育抜き

3）改革・長老派系諸教会の苦悩

旧大陸では長く「国教会」「地域教会」＝「同延的」在り方＝社会・教会 / 政治・宗教が同一構成員

幼児〔新生児〕洗礼の慣行→信仰問答教育→「堅信礼」・初めて陪餐会員＝投票権獲得

決断・回心体験・その場・その時の受洗よりも養育・形成・涵養の重視

①ドイツ改革派最初の日本派遣宣教師グリング（Ambrose D. Gring 1848 生まれ、F&M 大学・イェール神学校、1879（明治 12）年、来日、東京・埼玉等で伝道活動　先ず日本語習得、『漢・和・英字書』など

『鄙語海徳山問答』（1884〔明治 17〕）邦訳・出版　　→　心情＜信条　　献身＜涵養

②ドイツ改革派二人目の日本派遣宣教師　モール（Jairus P. Moore　1847 － 1935　F&M 大

学でグリング
同級生、ハイデルバーグ神学校卒。　1883（明治16）年、来日、東京でグリングと協力して開拓伝道
二人の初代宣教師の確執・葛藤
モール宣教師は自宅を開放して、説教・洗礼や聖餐式執行　　しかも教会役員会の承認抜き
普段礼拝に出られない歯科医に、医院に赴いて授洗
モールは、リヴァイヴァル・献身型　　それに対して、グリングは伝統的・涵養型

③類型化の試み

【グリング型】	【モール型】
信条（信仰告白文）	心情（真情の吐露）
先ず「知解」、それから信仰告白・堅信礼	先ず献身→真摯な『心向』
時間の中で漸次的形成	今・ここでの決断
学校教育（間接伝道）への傾斜と投資	教会形成（直接伝道）・教会の現場重視
同じ志向の共同体形成	個々人の主体性・個別性の重視
結果的に「共同体〔国家〕教会」の伝統	各個教会主義（会衆主義）・自由教会
聖礼典（洗礼と聖餐）の重用＜客観的恵みの象徴	説教中心の礼拝（決断の要求）
（Altar-centered　Christian Nurture）	（Pulpit-centered Commitment）
聖職者中心の教会型	平信徒中心の分派型

4）　ウィリアム・ホーイ宣教師（William E. Hoy 1858 － 1927）―対立から綜合へ

①基本的には、リヴァイヴァルの子〔上掲、「モール型」〕
ペンシルヴェニアの寒村の生まれ　幼少期から海外宣教への献身の念、未知の伝道地への憧憬と決心
F&M大学→ランカスター神学校　ドイツ改革派三人目の日本派遣宣教師として横浜着
全米神学校外国伝道協議会〔1882〕参加、ドイツ改革派教会機関紙に日本派遣宣教師の公募
「私の全身を貫き通すような戦慄を覚えた。私はこの地上のいやはての地までも赴く決心を固めていた。故国に留まる限り、私の魂には平安が得られないだろう。もしも改革派教会が私を派遣しないならば、私は他の教派に任職を探し求めたであろう」。
1885（明治18）年12月、横浜到着その時点で、任地さえも未詳, 押川方義との「劇的出会い」

②ドイツ改革派の遺伝子〔上掲、「グリング型」〕
宣教師志願書の質問箇条の一つ：回心体験の有無？
「あなたは、いつ・どこで回心を体験しましたか。それは信仰復興運動との関わりの中でしたか？」“When and where were you converted? Was it in a revival of religion?”
ホーイの回答欄「私はキリストに向けて成長した、というのが、私に出来る最も明確な答えです」。
同時に任職された宮城学院初代校長E.R.プルボー（Poorbaugh）およびM.オールト（Ault後のホーイ夫人）の答え「私はずっと、教会の中で育てられてきました」（“I was brought up in the Church.”）
現在、教職員公募書類に、あるいは日本基督教団牧師志願書類の中にこのような設問が……？

③ 1985（明治 28）年＝日本着任から 10 年後、賜暇帰米中のホーイに外国伝道局役職者の問う「宣教師は、『伝道』と『教育』とに割くべき時間と労力の比率いかん？」→ホーイの答え「同じ〔宣教〕という事業を二つに分ける意味が分かりません。すべての教育は、最良の意味で伝道事業です。私たちの奉仕は、イエス・キリストにおいて一つです。学校教育における働きは、伝道事業を補足し・強化します。他方、伝道事業は教育活動を援助します。どちらも、他方なくしては不十分なのです」。

“I do not see the propriety of making two questions out of one work. All our teaching is evangelistic work in the highest sense. Our work is a unit in Jesus Christ…… Our school work supplements and strengthens our evangelistic work, and our evangelistic work helps school work. Neither would be strong enough without the other.”（1895 年 2 月 8 日書簡）

④ランペ宣教師（William E. Lampe 1900 年来任）　後に母教会の外国伝道局総幹事
外国宣教運動の究極的目標＝改宗者の獲得に留まらず、宣教の土着化
自給（self-supporting）、自伝（self-propagating）、および自治（self-governing）を目指す
「会津の使徒」Christopher Noss から引用。「日本では教育は集約的伝道、伝道は外延的教育である。」

“In Japan education is intensive evangelism, and evangelism is extensive education. ……
with only one definite object in view…. the permanent establishment of the Kingdom of God.”

5）「キリスト教学校」の課題と問い―いつでも・どこでも・だれにでも

①信仰と理性＝信じることと知ること　　2000 年のキリスト思想史の問い

寄附行為等における「キリスト者条項」（“Christian Code”）と、学校法人経営の「知見」
キリスト教科目（聖書 / キリスト教学等）の設置理由・目標・教授法・評価等々の問題
キリスト教学校の「世俗化」への疑念・懸念
外堀（外部評価）も、内堀（自信・確信）も埋められて……？
その中で、教育職員・事務職員の「挙学・全学」的参与の可能性の模索

②信仰と感情＝信条と心情（creed と deed）

19 世紀のリヴァイヴァルの遺伝子と、継承された「涵養」の遺伝子の相剋（？）
教会中心の「直接」伝道か、学校重視の「間接」伝道か
歴史的実例：ドイツ改革派教会外国伝道局の予算配分をめぐって、東北中会における長い抗争
学内「伝道」の責務と限界　　キリスト教科目の設置・教授法・評価等の問題

③普遍的価値〔絶対〕と固有なもの〔特殊〕＝ナショナリズムの問題

宣教初期における宣教師団の≪主導性≫と、日本人指導者らの≪主体性・自主性≫の相剋
宣教師書簡など至るところで散見される「慨嘆」
ホーイ（1895年〔明治24〕年）「彼らの『愛国心』なるものは、病的と言うべきです。『我が国』という病的な語句は、『我らの父なる神の国』よりも、もっと包括的だと言うのでしょうか……」
「外圧」 事例： 1889〔明治32〕年公布の文部省訓令第十二号
「一般の教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学制上最必要トス依テ官公立及ヒ学科課程ニ関シ法令ニ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」
対抗策としてのキリスト教教育同盟会（現在、キリスト教学校教育同盟）の結成（1910）

④「キリスト教学校とは？」

→キリスト教信仰（入信）へ向けた、特定・固有な価値観注入のチャンスか？？？
→キリスト教に関する知識（他宗教などと並列的に、人類の知的・精神的遺産としての「文化財」）の伝達・相続
キリスト教学校不可能論； 眞理探求一般の普遍性と、宗教的献身の主体性とは相互排除的で、両立できないはず？？？
キリスト教学校における「キリスト者条項」の適否にまで延長されるか？？？
→特定の歴史的宗教としてのキリスト教をさえ含めて、真の絶対者なる神の前での「相対化」を継承？？？
→他者・「異者」なる個人や集団と、相互の畏敬をもって歴史の中で生きる修練？？？

EXHORTATION AND PREACHING AT THE CAMP MEETING AT EASTHAM.

平成 26 年 3 月 20 日改正

『キリスト教研究年報』執筆要綱

1　本誌は、静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部に在籍しているキリスト者教員（過去に在職していた者を含む。）の研究年報誌であり、該当教員の研究論文、研究ノート、その他キリスト教関連記事（チャペルなど）を掲載する。

2　編集委員会は、キリスト者教員である委員長及び教員若干名によって構成する。

3　委員長は、宗教主任とする。

4　原稿の掲載は、編集委員会の審議を経て決定する。

5　執筆者による校正は再校までとし、原則として大きな修正は認めない。

投稿要項

1　論文原稿は、未発表のものに限る。

2　原稿について

①原稿は、原則として横書きとし、電子媒体で提出する。

②「研究論文」は、1,600 字以内（注・図表等込み）の完全原稿とする。

③「研究ノート」は、12,000 字以内（注・図表等込み）とする。論文としての完成度は要求しないが、新たな方法論や視点を提供する内容であること。

④原稿は返却しないので、写しをとっておくこと。

⑤使用ソフトは、マイクロソフトワードとし、文字フォントは、原則として和文では明朝体、欧文では Century 体とする。

⑥原稿の文字の大きさ（ポイント）は、10.5 ポイントとする。

⑦原稿の用紙設定は、A4・縦置き・横書きとし、余白は、上 32mm、下 30mm、左右はともに 25mm とする。

⑧原稿の字数設定は、1 行半角 80 字（全角 40 字）、各ページ 40 行とする。

附則

この要項は平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

編 集 後 記

『キリスト教年報』第二号を発行することが出来ましたことを感謝いたします。昨年「キリスト教と音楽」というテーマで創刊号を出しましたが、二号が出せるかどうか、心配でした。しかし、「キリスト教と教育」というテーマのもと、4名のクリスチャン教員（柴田敏、山田美代子、木下ゆり《今回は掲載できず、次号で執筆する予定》、伊勢田奈緒）が集まり、それぞれの専門分野において研究し、発表する機会を得、ここに二号を刊行することが出来ました。キリスト教主義の学校は建学の精神をキリスト教に置き、それを教育の方針としてきたはずです。しかし、その建学の精神はただの「お飾り」になっているのではないかと思うことがしばしばあります。キリスト教の精神を伝えるのは宗教主任だけがそれを担うというのではなく、たとえ、少ないキリスト教教員であってもその使命の一端を担うことが大事なのではないかと考えます。同時にそれぞれの研究においても、キリスト教教員が信仰と向き合い、自分の専門分野と連動させて研究していくことも必要なのではないかと思います。この静岡英和学院大学の『キリスト教年報』は、前回も書きましたが、学内の教員には少しでもキリスト教に関心をもっていただくため、さらに、学外の同じキリスト教学校には静岡英和学院大学のクリスチャン研究者を知ってもらうことを目指しております。

今回の内容について、少しコメントさせていただきますと、学長の言葉には前号に引き続き、励まさせられます。「次号はない」ということがないようにこれから第三号へ向けて準備をしていきたいと思っています。本文を紹介させて頂きますと、先ず、現代コミュニケーション学科の柴田敏先生による「『羅生門』と『幸福の王子』」です。神のいない世界と、神のいる世界、神の支配する世界の違いを二つの作品を比べることによって論じられているもので意欲作だと思います。二番目は、コミュティ福祉学科の山田美代子先生による「地域文化活動『The 合唱団』がもたらす再帰性及びその教育的意味－参加学生のレポート分析より－」です。これは「音楽療法概論」を履修した本校学生が、地域文化活動として行われている「The 合唱団」に参加し、メンバーと共に活動する中で活動に何を感じ、どのような影響を受けたか、その体験をレポートの記述から解明しています。三番目は拙著の「宗教改革者ブーゲンハーゲンの目指した教育改革についての一考察」です。ブーゲンハーゲン（Johannes Bugenhagen）が生涯、教育改革に情熱をささげられたのはマルティン・ルターに出会う前もそれ以後も、彼自身の変わることのない「真の善き業」への強い追求心、究極的には「キリスト者としていかに生きるべきか」の切なる彼自身の問いにあると考えられます。このことを彼の教育の改革を通して明らかにしようとしています。以上の論文の他に、2014年3月で大学を去られます（執筆は2月現在）鈴木幸子先生と木下ゆり先生の各々のインタビュー（お二人の先生方のこれからが輝かしいものとなりますように神様の御力におゆだねします。）続いて2013年3月14日に行われた教職員研修会の際、配布された出村彰先生のレジュメ、そして2013年度宗教活動を掲載しました。

最後に、『キリスト教年報』第二号に協力して頂いた本学教員、執筆要綱改正にあたり、尽力いただいた本学の古牧事務部長、また篠原印刷株式会社堀氏に心から感謝いたします。

宗教主任　伊勢田　奈　緒

キリスト教研究年報　第二号

Christianity Study Annual

２０１４年３月３１日印刷
２０１４年３月３１日発行

編　集　「キリスト教研究年報」編集委員会
発　行　静岡英和学院大学キリスト教研究会
静岡市駿河区池田１７６９番地
電話（０５４）２６１－９２０１
印刷所　株式会社　篠原印刷所
静岡市駿河区登呂６－７－５
電話（０５４）２８６－５１４１